報告書

Vamos!

市民社会のミライ

～そのときわたしたちは何をしているだろうか？～

市民社会をつくる
ボランタリーフォーラム
TOKYO2025

2025年 2/8(土)・9(日)

2日間にわたり、様々な社会問題に
焦点をあてた17の分科会を開催します。

会　場 飯田橋セントラルプラザ及びオンラインほかで開催
東京都新宿区神楽河岸1－1　セントラルプラザ4階・10階・12階

参加費 1分科会：1,000円　学生（専門学校可）または18歳未満の方は無料
会場参加・フィールドワークの3分科会以上は一律3,000円（オンラインへの変更不可）
※分科会10交流会　カフェ&バル「VAMOS」の参加費は500円になります。また、一律3,000円の対象外になります。

主　催 東京ボランティア・市民活動センター

企画運営 市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2025実行委員会

後　援 東京都、認定特定非営利活動法人日本NPOセンター

特別協賛 西武信用金庫、デロイト トーマツ グループ、株式会社三菱UFJ銀行

協　賛 NECネッツエスアイ株式会社、社会福祉法人清水基金、
公益財団法人SOMPO福祉財団、社会福祉法人テレビ朝日福祉文化事業団、
東京都生活協同組合連合会、公益財団法人日本社会福祉弘済会、
公益財団法人日本テレビ小鳩文化事業団、株式会社熊谷組、
特定非営利活動法人モバイル・コミュニケーション・ファンド

協　力 生活協同組合パルシステム東京、公益財団法人SOMPO環境財団、中央労働金庫、
モンデリーズ・ジャパン株式会社

フォーラムホームページ：http://tvac.or.jp/vf/
ボランタリーフォーラム

Facebook　X（旧Twitter）　Instagram

お問い合わせ 東京ボランティア・市民活動センター　TEL：03-3235-1171　FAX：03-3235-0050

はじめに

東京ボランティア・市民活動センターでは、「ボランティアまつり」「ぼらんてぃあ・めっせ」、2004年からは「ボランタリーフォーラム」と名前を変えながらも、開設当初より、ボランティアや市民活動に関わる方や関心のある方、また日頃からNPO・NGOで活動されている方が集い、つながる場をつくってきました。

今年度の「市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO２０２５」（以下、「Vフォーラム」）では、「Vamos！ 市民社会のミライ ～そのときわたしたちは何をしているだろうか？～」をキャッチフレーズに、１９の分科会（交流会・クロージングを含む）と、２つの特別企画（ふれあい満点見本市／ボランティア・市民活動情報誌『ネットワーク』展）を実施しました。分科会では、参加者、登壇者、ボランティア、実行委員、スタッフを合わせのべ699名の方にご参加いただき、ふれあい満点見本市「展示・販売ブース」「体験ブース」では、23団体の出展、ブースに立ち寄っていただいた方はのべ626名となりました。

本報告書には、それぞれの分科会の開催目的や様子、分科会を通して伝えたかった実行委員の想いや参加者の声、実施しての成果やこれからの課題が掲載されています。また、職種や年齢が異なる多様な実行委員会メンバーが、議論を重ねながら、Vフォーラムの形を作り上げてきた記録も同時に収められています。

より多くの方が本報告書を目にすることによって、誰もが笑顔で過ごすことができるような社会を築いていくための、一人ひとりにとってのきっかけや新たな一歩となることを願っています。

東京ボランティア・市民活動センター

もくじ

はじめに

第１章　企画編

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2025 ができるまで・・・・・・・・　2

第２章　実施編

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2025 開催概要・・・・・・・・・・　6

各プログラム実施報告

01　ボランティアが社会を変える
　～区市町村から始める身近な仕組みづくりへのアプローチ～・・・・・・・・・・　8

02　暮らしとつながる世界の森を考えよう ～パーム油を知っていますか？～・・・・・　10

03　そのトピックは事実？ フェイクを見抜いて社会をよくする・・・・・・・・・・・　12

04　もっと知りたい！デフリンピック ～聞こえない人のオリンピック～・・・・・・・　14

05　「予期しない妊娠」は私のせい？ PART1
　～女性を取り巻く出産の現場から～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　16

06　「無機質な住民」から「彩りある市民」へ
　～まちあるきから考える！まちの風景、今未来（いまみらい）～
　【ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸ】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　18

07　学生サミット ～団体運営に革新を～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　20

08　場づくりのいろは ～居場所づくりで大切な事とは～・・・・・・・・・・・・・・　22

09　「予期しない妊娠」は私のせい？ PART2
　～女性を取り巻く出産の現場から～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　24

10　交流会　カフェ＆バル🍸VAMOS・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　26

11　「親なきあと」を考える
　～老障介護の現実と課題について～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　28

12　大人が変われば子どもも変わる
　～アンコンシャス・バイアスを知ろう！～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　30

13　多文化共生ｘ街角
　－ コインランドリー・量り売り・カフェ　生活の場から出会いを考える －・・・・　32

14　セカンドライフを充実させるボランティア・地域活動のコツって何だろう？・・・・　34

15　多文化共生まちあるき ー大久保に暮らす人びとと私たちー【ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸ】・・・・・・ 36

16　地域共生社会に向けて！大人たちに伝えたい
～【障がい者の思いと心のバリアフリー】～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38

17　子どもの社会参画と育ちを考える ～映画「こどもかいぎ」をもとに～・・・・・・・・ 40

18　能登のいま・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

19　クロージング
「Vamos！市民社会のミライ～そのときわたしたちは何をしているだろうか？～」 44

特別企画　ふれあい満点見本市「展示・販売ブース」 ～NPO・NGO の作品展示販売～ 46

特別企画　ふれあい満点見本市「体験ブース」 ～NPO・NGO の活動体験～・・・・・・ 47

特別企画　情報誌『ネットワーク』表紙原画展・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48

（参考）チラシから見る 各プログラムの紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49

（参考）市民社会をつくるボランタリーフォーラム開催状況・・・・・・・・・・・・・・・ 54

実行委員会名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55

協賛・協力団体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56

ボランティアでご協力いただいたみなさま・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56

ボランタリーフォーラムにご協力いただいたみなさま・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56

＜第１章＞
企画編

ボランタリーフォーラムができるまで

市民社会をつくるボランタリーフォーラムＴＯＫＹＯとは？

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO（以下、「Ｖフォーラム」）は、私たちの暮らしに関わるさまざまな「社会課題」に焦点をあて、それを共有し、私たち市民にできることを考えていくためのイベントとして 2004 年から継続して開催しています。

初回から一貫して、分野、地域、セクターを横断したボランティア・市民活動にかかわるメンバーで実行委員会を組織し、ボランティア・市民活動をする中で直面する課題や想いをもとに企画・運営しています。分科会を通して、想いや考えを共有し、参加者や実行委員のそれぞれの一歩につながることを目的としています。

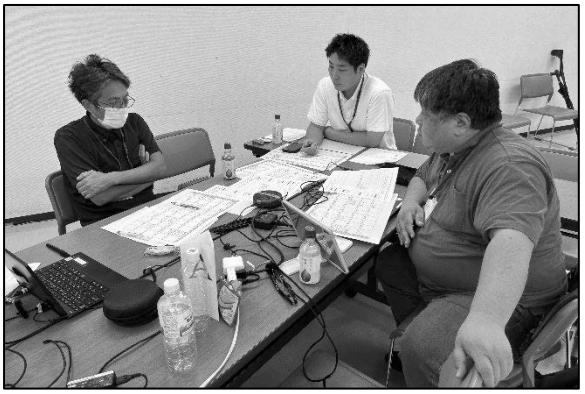
実行委員会について

実行委員会の様子。会場とオンラインのハイブリッドで開催しました。

Ｖフォーラムの今年度の方向性を検討するために、まず準備会を開催しました。準備会は、長年Ｖフォーラムに関わっている少数のメンバーで構成され、これまでのＶフォーラムを振り返るとともに、今年度の方向性や運営、実行委員会のあり方などについて話し合いました。

実行委員会は、準備会での話し合いをふまえ、さまざまな分野・地域から集まったメンバーで立ち上げ、取り組んでみたい社会問題についてのグループワーク、テーマ決め、分科会に関する話し合いを行いました。今年度は総勢 23 名の実行委員と、振り返りの回を含め全 10 回の実行委員会を開催しました。

実行委員には「今気になること・共有したい社会課題」をキーワードとして出していただき、共通の視点、あるいは異なる視点を分科会の内容に盛り込んでいただくため、５つのグループに分かれて検討を重ねてきました。また昨年度からの変更点として、各自で分科会企画案を作成するのではなく、グループのメンバーで話し合いながら、グループで分科会を企画していく形式で行いました。そのためグループには、分科会の主担当として企画を進めていく人もいれば、副担当として複数の分科会のサポートに入る人もいました。日頃から多様な分野で活躍している実行委員の、さまざまな視点からの意見を加えることで、よりブラッシュアップされた分科会が出来上がっていきます。グループメンバーで何度も話し合い、また各グループの進捗状況を全体で共有することを重ね、今年度は交流会とクロージングを除く 17 の分科会が出来上がりました。



分科会の内容は、それぞれグループで意見を出し合いブラッシュアップしていきました。

また、こうした分科会の企画を進めると同時に、Ｖフォーラム全体に関わる運営については、「部会」で話し合いを進めました。今年度の部会は、Facebook や Instagram・X など SNS の活用や PR 動画を作成する「広報部会」、クロージングの企画を行う「全体会部会」、参加者同士の交流の場や実行委員間の交流会を企画する「交流会部会」の３つです。実行委員はいずれかの部会に属し、分科会企画のグループとはまた違

ったメンバーと話し合いを重ねました。実行委員経験のある人が、今年度初めて実行委員となった人のフォローをしながら進められたほか、広報用の動画編集など特技を活かした関わりをする実行委員の姿も見受けられました。

終了後のアンケートでは、実行委員から「オンラインも併用しているので、実行委員側の参加ハードルが下がっていて、参加しやすい環境で進められました」「チームで取り組むことの大変さもあれば、助け合うことの良さも実感した」との感想をいただきました。

分科会企画案の公募

これまでのＶフォーラムにない視点や分野、課題を取り入れ、より幅広い社会的テーマで分科会を企画することをねらいとして、分科会企画案を公募しています。分科会企画案の公募が採用された場合も、案をそのまま実施するのではなく、公募の提案者も実行委員となり、他の分科会企画と同様、実行委員会で内容を検討し、多様な考え・意見を取り入れた上で、内容を磨き上げていきます。また、他の分科会についても共に内容を検討し、Ｖフォーラム全体の運営にも関わります。

募集概要と実施結果

【内容】

- Ｖフォーラムのプログラムの一つとして分科会企画案に基づいた社会課題の発信機会の提供
- 2025 年２月８日（土）～9日（日）の内１コマ
- 予算は、30,000 円まで　など

【条件】

- 月１回程度、平日夜間に開催される実行委員会への参加が可能であること
- 企画案をもとに、実行委員会の中で一緒に議論・検討し、企画を作り上げ、実施に向けて協力していけること
- Ｖフォーラム当日の２日間に出席し、他の分科会準備、運営も含め協力いただけること
- Ｖフォーラムへの参加を通して得た発見や学びを自身の所属団体に還元できること

など

【応募方法】

- 所定の応募フォームに入力の上、東京ボランティア・市民活動センターまで送付。

【応募説明会】2024 年５月28日（火）19 時～20 時

【応募期間】 2024 年５月 15 日（水）～6月 14 日（金）

【結果通知】 2024 年７月５日（水）

実施結果

- 応募　１件
- 採用　１件
- 応募者所属内訳

　社会福祉法人・・・・・・・ １人

選考のポイント

- 現代社会におけるテーマであること
- 広く一般を対象にしたテーマであること（参加対象を制限しないこと）
- 多様な市民の参加が期待されるテーマであること
- Ｖフォーラムで波及効果が期待されるテーマであること
- 自団体で既に行っている、または行うことのできる企画ではないこと
- 他団体との連携・協働が求められるようなテーマであること
- 企業の営業・宣伝活動、特定の政党・政治に関わる活動、 宗教の普及に関わるものでないこと

＜第 2 章＞
実 施 編

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2025
開催概要

趣旨

「市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO」は、私たちの暮らしにかかわるさまざまな社会問題に焦点をあて、私たち市民にできることを考えるイベントとして、2004 年から開催しています。企画運営は実行委員会形式で、さまざまな分野や地域、セクターから集まったボランティアや市民活動に関わるメンバーで構成されています。私たちは、潜在する社会問題に対する「考え、行動する力」を高めるために、実行委員同士で問題意識を持ち寄り、分科会を企画し、社会課題を発信しています。

「ボランティア元年」と呼ばれた 1995 年の阪神淡路大震災から 30 年の節目となり、この間ボランティアや市民活動は多様な役割を求められるようになりました。私たちは市民社会の未来を見据え、一人ひとりが希望を持って共に進んでいきたいという思いから、今年のキャッチフレーズを「Vamos！市民社会のミライ ～そのときわたしたちは何をしているだろうか？～」にしました。Vamos には「さあ、行こう」や「がんばれ」という意味があります。ボランタリーフォーラムでは、私たち一人ひとりがボランティアや市民活動に関心を持ち、よりよい市民社会を実現するために考え、行動するためのきっかけとなるような場を目指します。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

それでは、Vamos！

開催概要

キャッチフレーズ	Vamos！ 市民社会のミライ ～そのときわたしたちは何をしているだろうか？～
開催期日	２０２５年2月８日（土）10：00 ～ 20：30 ２月９日（日）10：00 ～ 17：30
会場	飯田橋セントラルプラザ及びオンライン（Zoom）ほか
主催	東京ボランティア・市民活動センター
企画運営	市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2025 実行委員会
後援	東京都、認定特定非営利活動法人日本 NPO センター
参加費	1 分科会：1,000 円　会場参加・フィールドワークの 3 分科会以上は一律 3,000 円 学生（専門学校可）または 18 歳未満の方　無料

参加者のべ数	502 名
出演者	45 名
実行委員・運営スタッフ・ボランティアのべ	152 名
全参加者のべ数	699 名

■スケジュール

日	時間	会場	分科会
2月8日（土）	10:00～12:30	12 階 AB 会議室	1　ボランティアが社会を変える ～区市町村から始める身近な仕組みづくりへのアプローチ～
		12 階 CD 会議室	2　暮らしとつながる世界の森を考えよう ～パーム油を知っていますか？～
		10 階 AB 会議室	3　そのトピックは事実？ フェイクを見抜いて社会をよくする
	13:30～15:30	12 階 CD 会議室	4　もっと知りたい！デフリンピック ～聞こえない人のオリンピック～
		10 階 AB 会議室	5　「予期しない妊娠」は私のせい？ PART1 ～女性を取り巻く出産の現場から～
	15:00～17:00	墨田区京島 キラキラ橘商店街	6　「無機質な住民」から「彩りある市民」へ ～まちあるきから考える！まちの風景、今未来（いまみらい）～ 【ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸ】
	16:30～18:30	12 階 AB 会議室	7 学生サミット ～団体運営に革新を～
		12 階 CD 会議室	8 場づくりのいろは ～居場所づくりで大切な事とは～
		10 階 AB 会議室	9　「予期しない妊娠」は私のせい？ PART2 ～女性を取り巻く出産の現場から～
	19:00～20:30	12 階 A～D 会議室	10 交流会　カフェ＆バル🍸VAMOS （参加費 500 円）
2月9日（日）	10:00～12:00	12 階 AB 会議室	11 「親なきあと」を考える ～老障介護の現実と課題について～
		12 階 CD 会議室	12 大人が変われば子どもも変わる ～アンコンシャス・バイアスを知ろう！～
		10 階 AB 会議室	13 多文化共生 x 街角 - コインランドリー・量り売り・カフェ　生活の場から出会いを考える
		4階 都民連会議室	14 セカンドライフを充実させるボランティア・地域活動のコツって何だろう？（10：00～12：30）
		新宿区大久保周辺	15 多文化共生まちあるき ー大久保に暮らす人びとと私たちー 【ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸ】
	13:30～15:30	12 階 AB 会議室	16 地域共生社会に向けて！大人たちに伝えたい ～【障がい者の思いと心のバリアフリー】～
		12 階 CD 会議室	17 子どもの社会参画と育ちを考える ～映画「こどもかいぎ」をもとに～
		10 階 AB 会議室	18 能登のいま
	16:00～17:30	12 階 A～D 会議室	19 クロージング「Vamos！市民社会のミライ～そのときわたしたちは何をしているだろうか？～」（参加費無料）

■特別企画

2月8日（土）・9日（日） 11:00～16:00	1 階エントランスホール （展示販売ブース）	ふれあい満点見本市 ～NPO・NGO の作品展示販売／体験ブース～
	1 階区境ホール （体験ブース）	
開催期間中いつでも	10 階フリースペース	ボランティア・市民活動情報誌『ネットワーク』展

No.１　ボランティアが社会を変える
～区市町村から始める
身近な仕組みづくりへのアプローチ～

開催目的

ボランティアは本来困りごとの支援だけでなく、困らない社会を作る役割も担っています。そのためには、ボランティア自身が社会を変える可能性を信じ、議会や行政に対して働きかけることも重要です。また、ボランティアが社会変革の推進者として再認識されることが求められています。本分科会では、登壇者の話を伺いながら、参加者がどのように社会を変えていけるかについて話し合いました。

開催日時

２月8日（土）１０：００～１２：３０

参加者数

３９名（参加者２９名、出演者４名、スタッフ５名、ボランティア１名）

出演者

事例提供者：大村 みさ子さん（一般社団法人子ども村ホッとステーション代表理事）
　　大橋 美紀さん（一般社団法人探求あそび場づくりの輪）
コメンテーター：安藤 雄太さん（東京ボランティア・市民活動センターアドバイザー）
進行：川田 虎男さん（NPO 法人ハンズオン埼玉代表理事・埼玉県立大学准教授）

内容・成果・課題

１．内容

（１） 大村さんからの事例提供

大村さんは元高校の英語教師で、退職後子育てをする中で、学習支援や地域活動を行い、子どもたちの居場所や支援を提供する「子ども村ホットステーション」を立ち上げました。活動に取り組む中で、中高生の支援の重要性を感じ、行政に相談しましたが全く取り合ってもらえず、次に社会福祉協議会（以下、社協）を訪ねたところ、当時の課長の後押しで、社協の助成金が出る流れになりました。その後、社協の調整によって行政からの補助金も決定し、活動が拡大していきました。現在は、地域内のネットワークを強化し、子どもたちが安心して過ごせる場所を作り続けています。「ファミリー」の感覚を大切に、子どもたちやその家族、支援者、行政、社協との信頼関係を築いています。

（２） 大橋さんからの事例提供

大橋さんは 1982 年に世田谷区で長女を出産し、自主保育駒沢おひさま会への参加をきっかけに、子どもたちと外で遊ぶ楽しさや子育てを母親同士で支え合う重要性を実感。転居した川崎市では自主保育とプレーパーク「ポレポレ」を立ち上げ、1992 年に中野区に転居後、公園のリニューアル委員会でプレーパークを提案しましたが、実現しませんでした。2004 年には文部科学省の地域子ども教室推進事業に採択され、プレーパーク「夢発見！草っパラダイス」の活動を開始。その後、区外から転居してきた親たちを中心に出張プレーパーク活動が広がり、2018 年には現職の区長当選とともに子どもの権利条例が施行され、常設プレーパーク設置の動きが加速化。大橋さんは議員や職員と連携し、理解を得るための活動を続け、2025 年秋には江古田の森公園に常設プレーパークが新設される予定です。

（３） 川田さん、安藤さんによる事例の掘り下げ

「ネットワークで課題を共有した結果、行政が政策に反映し、変化があった事例はありますか」（川田）

大村：子ども食堂の立ち上げ時、区の助成金は獲得できませんでしたが、社協の支援により、保険や場所の提供を受けることができ、無事に子ども食堂が開設されました。社協の支援のおかげで活動実績が蓄積され、その後、区からも助成金が支給されるようになりました。

「社会を変えていこうと活動をするときにどんな応援団がいるとありがたいか」（川田）

大村：子ども食堂の立ち上げ時、物理的・制度的面で活動を支えてくれて、区との連携のきっかけにもなった社協や、活動のなかでは若者の存在です。
大橋：川崎在住時にプレーパークについて一緒に考えてくれた若手の行政職員による研究会や中野区で一緒にプレーパークの常設化に取り組んでくれた生活者ネットワーク、また最近では社会貢献の一環で活動を支えてくれる企業の存在です。
「行政が変わっていくときに、どういった働きかけをされたのか」（安藤）
大村：行政が自ら連携活動の成果を発表する政策コンクールに出場し、区長が発表を行った結果、受賞。区が本格的に活動を応援する契機となりました。そして、社協の職員が退職後も活動を支え、行政との連携についてアドバイスをしてくれました。また、行政職員もファミリーという意識で、担当部署を異動したあとも挨拶を欠かさず関係を絶やさないようにしています。
「ネットワーク内でぶつかったりするときにだれが調整するのか」（安藤）
大村：どこまで支援するのかぶつかったことがありましたが、そのときにいろんなところがあるのがネットワークの良さと思い直しました。以降はネットワークのメンバーにもそのように伝えています。
「行政職員はどういう風に変わっていったのか、そこにどのようにかかわったのか」（安藤）
大橋：区役所にはちょこちょこ行って相談するようにしています。常設のプレーパークを作ることが決定してから、担当の職員も一生懸命関わってくれるようになりました。
「プレーパークにおじさんたちが加わっていったのは自然発生的だったのか働きかけたのか」（安藤）
大橋：地域の要となっている男性に若いママたちとプレーパークをつくりたいという話をしにいったら関心を持って夫婦で通ってくださるようになった。そこからご夫婦の仲間の駒回し名人や木工作名人のおじさんたちが技を見せて、子どもたちが喜び遊ぶのを見て楽しくなり、団体がつくられました。
（４） グループワーク
お二人の話を伺って、活動に取り入れていきたいと思ったこと、行政等に働きかけていきたいと思ったことについてグループで話し合いを行い、「仲間を見つける」や「熱意とその継続性」、「行政とのつながりは想いがあってこそ」、「人として出会う」といった大切にしたい想いや行動が共有されました。
（５） 安藤さんによるまとめ
　ボランティアは地域文化を形成する重要な主体だと感じます。これは市民の価値観や経験によってつくられるもので、行政が云々言うものではありません。市民活動は公平性を求めないため、行政とは異なるアプローチを取ることがありますが、その時に大切になるのが地域のネットワークです。そして活動を継続し、次世代に引き継ぐためには多様な人びとを巻き込むことが必要で、その時に中間支援組織が重要な役割を果たします。ボランティアは人とのつながりの中で地域文化をつくりあげるものと捉えると良いと思いました。
２．成果と課題
　事例提供者のお話や事例の掘り下げを通じて、最初は実現しなかった活動や制度が、仲間や社協、行政との関係づくりのなかでいかに実現してきたのかをお話しいただきました。これはハウツーではなく、諦めずに願いを持ち続け行動した結果であり、私たち一人ひとりの覚悟を問う時間でもありました。今回、話題のなかで中間支援の役割も強調されましたが、その部分には焦点を当てられなかったため、今後は中間支援や行政の視点からも議論できると良いと感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 印象に残る言葉はいくつもあるのですがネットワーク内のコンフリクトに対する対処で「お互いの違いを違いとして認める」というのは忘れずにいたいなと思います。
- 行政や役所をまきこむのは、長い時間と、人々のつながり、そして少しのテクニックが大事なのだと学びました。でも何より「想い」が大事。

企画・運営

芦澤　弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）【主担当・報告書】
久保　賢人（中野ボランティアセンター）【副担当】

No.２　暮らしとつながる世界の森を考えよう
～パーム油を知っていますか？～

開催目的

パン、スナック菓子などの加工食品や洗剤などの日用品にも使われるパーム油は、世界で一番多く使われている植物油です。インドネシアやマレーシアを中心に、森林を乱伐採するプランテーション型大規模農園によって生産されており、環境破壊に加えて、人権侵害の実態も指摘されています。日本で使用されるパーム油は、すべて輸入されたものです。この分科会では、パーム油にまつわる現状と問題について学び、私たちができることについて考えました。

開催日時

２月８日（土）１０：００～１２：３０

参加者数

２１名（参加者１３名：うち会場８名、オンライン５名、
出演者２名、スタッフ５名、ボランティア１名）

出演者

青木　崇史さん（認定ＮＰＯ法人ボルネオ保全トラスト・ジャパン　理事・事務局長）
髙階　悠輔さん（認定ＮＰＯ法人開発教育協会　理事）

内容・成果・課題

１．アイスブレイク

開発教育協会発行の教材『パーム油のはなし―地球にやさしいってなんだろう？』を使い、髙階さんよりパーム油についてのクイズを行いました。「Q 世界で最も多く使われている植物性油脂は何でしょう？」、「A パーム油（日本ではナタネ油）」。「Q 日本に輸入されているパーム油はどこの国のものが多いでしょう？」、「A マレーシア（生産量ではインドネシアが世界一）」。「Q 日本に輸入されたパーム油は何に１番多く使われているでしょう？」、「A マーガリンやショートニングなどの加工油脂として」。「Q パーム油はなぜ多くの製品に利用されているのでしょう？」、「A 一度油ヤシの木を植えると、約 24 年間通年で収穫できるから／同面積から採れる収穫量が大豆油、ナタネ油よりも多いから／風味や匂いがなく、加工食品に使われやすいから／ほかの植物油よりも値段が安いから」。

２．青木さんのお話

（１）ボルネオ島

ボルネオ島は日本から飛行機で６時間半ほど離れた赤道直下の熱帯雨林の島です。マレーシア（サラワク州、サバ州）、ブルネイ、インドネシアの３つの国が入っています。インドネシア語では、カリマンタン島と言い、生物多様性の宝庫です。ボルネオ島と言えば、オランウータン、ボルネオゾウ、テングザル、ワニ、サイチョウの５つが有名ですが、哺乳類、鳥類、両生類、昆虫類もたくさんいます。

（２）アブラヤシプランテーション

プランテーションは、熱帯・亜熱帯地域の広大な農地で単一作物を栽培する大規模な農園です。熱帯雨林を切り開いて、広大な土地でアブラヤシを育てます。畑なので、動物たちがすめる環境ではありません。ボルネオは約 50 年前には 75～6%が森でしたが、2016 年は島の真ん中の山岳地帯には森が残っているものの、森は５０％ほどになっています。約 1500 万年森だったものが、わずか 100 年で削られてしまいました。熱帯雨林を食いつぶしてプランテーションにしています。

（３）パーム油

アブラヤシの果実からパーム油（果肉：パーム油、核：パーム核油）が採れます。植物油はドレッシングなど「そのまま食べる」、スナック菓子など「間接的に食べる」、洗剤など「食べ物以外」に使われます。プランテーションから実を集めて、工場に持っていき、蒸して、搾り、口に入れやすくするために加工します。

パーム油の生産適地は赤道周辺の熱帯雨林で、インドネシアが 4,300 万トン（56%）、マレーシア 1,971 万トン（26%）で、この２ヶ国にとって経済的にとても重要です。パーム油が世界で最も消費される理由は、他の植物油より小さい面積で大量に作ることができ、価格が安いうえに安定供給されるだけで素晴らしいのに、「サクサク」「パリパリ」「とろ～り」で美味しく、品質が長持ちで加工食品に最適。食品、非食品に関わらず広く使うことができる、人間の快適な生活に欠かせない大事な植物油なのです。なお、食品の成分表には、「植物油」「植物油脂」などと書かれています。

便利な一方、様々な問題を抱えています。熱帯雨林の急激な減少、生物多様性の急激な減少、労働環境や人権侵害の問題があるのです。熱帯雨林の減少は二酸化炭素の排出、水や大気循環の喪失、保水や降雨の調整機能のバランスを崩します。生物多様性の劣化は野生動物の減少や絶滅危惧種の増加につながり、自然環境が本来持つ機能を失う引き金になるのです。違法労働や不法労働、児童労働といった農園内での人権問題が指摘されており、立場の弱い労働者が搾取されています。SDGs の「12．つくる責任、つかう責任」に関わるのです。

「使う責任って何だろう？」。今日からできることを考えていただければと思います。

（４）質疑応答

質問：認証を受けたパーム油もありますが、欧米ではパームフリーやオーガニック系のパーム油があります。私たちは何を選択したらよいのでしょうか？

回答：2004 年に RSPO（持続可能なパーム油に関する円卓会議）という NGO が設立され、環境にも人権にも配慮して生産する農園のパーム油にサステナブル認証ラベルを付ける制度ができました。欧米では、パーム油を使っていないパームフリーのラベルが貼られた商品もあります。パーム油を使わざるを得ないのであれば、認証商品を選択することが基本ではないでしょうか。

３．グループワーク（３グループ：会場２、オンライン１）

感想共有の後、『パーム油のはなし』を活用したワークショップを行いました。まず、次の９つの選択肢について個人として優先度が高いと思う順番を考えました。「家族や友人にパーム油の話を伝える」「パーム油について調べる」「仲間を集めて勉強会を開き、解決策を考える」「買い物をする時に、その商品の表示を確認する」「現地に行って実際の様子を見てくる」「買い物をするときに RSPO の認証マークがついているものを選ぶ」「食品会社や洗剤会社に質問や問題提起をしてみる」「環境保護団体（ＮＧＯ）などの活動に参加・支援する」「選挙の時に環境や人権を大切にする人や政党に投票する」。次に、もし仲間がいた場合の優先度が高い順番を考えました。

４．成果と課題

パーム油の特徴や課題など、また、バナナやコーヒーなど他のプランテーションについても同様であることについて学ぶことができました。更に、課題の解決は簡単ではないことも分かりました。なお、遠くの国で起きていることではなく、私たちの暮らしに深く結びついており、消費者として、批判的な目を持ちながら、小さなことからでも行動していくことが必要でしょう。

参加者の声（アンケート結果などから）

- セッションの中で個人ではどう感じるか、仲間と一緒ならどう感じるか、という質問で回答が変わるのがすごく面白かったです。
- 家族や友人に事を伝えることや、商品を手に取る時に今回の事を意識してみようと思った。

企画・運営

鹿住　貴之（認定 NPO 法人 JUON㈱NETWORK）【主担当・報告書】

髙階　悠輔（認定 NPO 法人シャプラニール＝市民による海外協力の会）【副担当】

No.３　そのトピックは事実？
フェイクを見抜いて社会をよくする

開催目的

SNS が主なコミュニケーションツールとなる中、目を引くニュースや人を誹謗中傷するトピックが注目を浴び、いつの間にか拡散、事実として社会に広まっています。時には、社会の課題に取り組んでいる市民活動が対象になることもあります。しかし、そのトピックは事実でしょうか？　気軽に拡散できることで、知らない間に誰かの「嘘」に加担しているかもしれません。我々自身に事実と嘘を見抜く力が必要な時代であることを、多様な方と一緒に考えたいと思いました。

開催日時

２月8日（土）１０：００～１２：３０

参加者数

３８名（参加者３０名：うち会場１４名　オンライン１６名、出演者２名、スタッフ５名、ボランティア１名）

出演者

岡田　憲治さん（専修大学法学部　教授）
枝見　太朗さん（社会福祉法人東京都共同募金会）

内容・成果・課題

１．参加者同士の自己紹介、参加動機や SNS をどう使っているかの共有

分科会の初めに、自己紹介を兼ねて、参加動機や SNS の使用状況などを伺いました。子どもに関わる施設の方や学生、中間支援の方など多様な方が参加していましたが、最近の報道からフェイクをどう見分けるのか、子どもたちにフェイクについて教えたい、メディアの情報の取り扱いなどが気になる、といった参加動機が挙げられました。中には、SNS ではなくても戦時中なども含めて、常にフェイクは巷に溢れているという意見もありました。SNS については、情報をとるのみという方が多かったようです。

２．岡田さんからのお話し

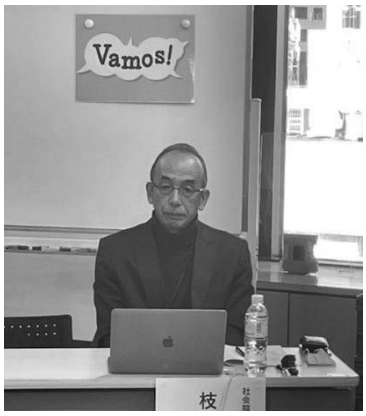
参加者のみなさんからの動機を受けて、岡田さんからは具体的かつ決定的な処方はないこと、みんなで話し合って発見していきたいとのコメントがありました。

まず過去もフェイクは社会に溢れていましたが、ただ、SNS によって、自分の意見を各自が発信できる時代となりました。そして、希望すれば誰にでもリーチができる時代です。民主化が進んだともいえるかもしれませんが、同時にフィルターがなくなったとも言えます。そして、その場は、「公共的空間」であるにも関わらず、「公共性」についての議論がされていないのではないか。SNS でみられる暴力的で不愉快な投稿は、まさに SNS 空間が「公共的な場」であることの認識がないことの表れだというお話がありました。

３．枝見さんからのお話し

市民活動こそが社会を変えるんだ、というコメントから始まりました。SNS による誹謗中傷が市民活動団体にも及んでいること、その団体に資金を提供する先にも矛先が向いている現実があります。炎上ビジネスともいわれる現象です。社会的活動を支援している団体に対して誹謗中傷を発信する人がいて、さらにその誹謗中傷を拡散する人がいます。ボランティアは余裕のある人のやること、余計なことには関わ

りたくないと考える人や、自分と違うことを攻撃する人もいる中、本当のことを伝え続けることが必要であると思います。そのために自分の目で見て、経験することが大切です。真実をどう探り当てていくのか、人と対話しながら、各自が自分で考え続けることが大切です。



4. グループでの意見交換と全体での意見交換

お二人の話を聞いても、やはりフェイクを見抜くヒントが欲しい、という声が多く、岡田さんの意識していることを伺いました。

・情報のソースを確認する、発信が匿名ではないかどうか。
匿名の人は、反対意見があっても対話する気がない、初めから結論ありきの人の可能性が高い。
・何を目的にしているのか、何を守りたいのかが見えること、軸を持っているかが大切。

また、枝見さんからは、他人の言葉では決めないことが大切。若い人は経験値も少なく、情報を鵜呑みにしてしまうこともあると思うが、その情報は本当なのか、ちゃんと調べること、また、信頼できる大人に意見を聞くことも大切です。人生は選択の連続だから、自分にとってよい選択ができるように意識することも大事です。

5. まとめ

何がフェイクなのか、何を信じるかは、自分自身で考えていくしかありません。情報の受け取り方も年齢によって全く異なります。いろいろな世代、いろいろな人と付き合うことで、どんな言葉が届けたい人に届くのか、自分自身は何を守りたいのか、社会がどうなったらいいのか、そんなことを考え、話し合っていくことが大切です。そして、本分科会もその 1 つの場である事にも気づきました。「自分の存在に価値がある、幸せになるために生きている。解は自分で考える」。2 人の登壇者からのメッセージをしっかり考えていきたいと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

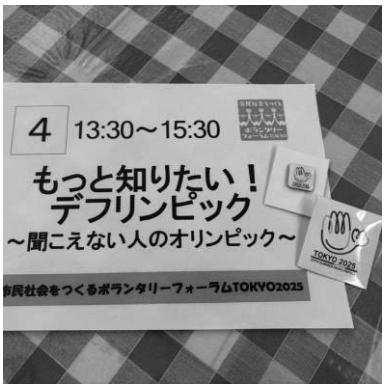
- よく分からずに参加しましたが、情報とどう向き合うかは、自分の信念や社会観とつながっているという、私にとっては意外な気づきになりました。
- ＳＮＳを扱ううえで、「自分の軸を持つこと」「匿名の投稿とはやりとりしない」「相手に伝わるように、方法を工夫する」といった点が参考になりました。まとめると、情報の発信者側と受け手の双方に努力が必要なのだと思いました。
- 実際に自分から行動し、自分軸を見つけていきたいです。また多角的に情報を収集し、偏った見方にならないように注意したいと思います。

企画・運営

神元　幸津江（NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)）【主担当・報告書】
市川　徹（(株)世田谷社/一般財団法人世田谷コミュニティ財団）【副担当】

No.４　もっと知りたい！デフリンピック
～聞こえない人のオリンピック～

開催目的



デフリンピックとは、デフ＋オリンピックのことで、デフ（Deaf）とは、英語で「耳がきこえない」を意味します。きこえない・きこえにくい人の国際的なオリンピック「デフリンピック」が、2025 年 11 月 15 日～26 日に東京で開催されます。第１回は、1924 年にフランス・パリで開催されました。正式名称、第 25 回夏季デフリンピック競技大会 東京２０２５（以下「東京２０２５大会」という）は、100 周年の記念すべき大会となります。4 年毎に開催されますが、日本では初めての開催になります。この特別な機会を多くの人が知り、ボランタリーな動きのどうつながるのかについて模索しました。

開催日時

２月８日（土）１３：３０～１５：３０

参加者数

３６名（参加者２８名：うち会場１７名、オンライン１１名、出演者２名、スタッフ６名）

出演者

倉野　直紀さん（一般財団法人全日本ろうあ連盟 デフリンピック運営委員会　事務局長）
枝見　太朗さん（社会福祉法人東京都共同募金会）

内容・成果・課題

１．倉野さんより東京２０２５大会について

大会関係者として、トルコ（夏・冬）・イタリア・ブラジルの計４回デフリンピックに参加した経験のある倉野さんより、デフリンピックおよび東京 2025 大会についてお話いただきました。

東京 2025 大会には、約 70～80 か国・地域から、3,000 人の選手を含む 6,000 人の選手団が来日予定です。競技会場は、東京体育館（開閉会式、卓球）、駒沢オリンピック公園（陸上、ハンドボール、バレーボール）、福島県（サッカー）、静岡県（自転車）などが予定されています。出場選手は、きこえる音が 55dB（デシベル）を超えることが条件で、競技中は補聴器を外して参加することが条件です。スタートピストルの代わりにランプの光を利用するなど、きこえなくても目でわかる視覚的保障が行われている点がデフリンピックの特徴となります。デフリンピックは、パラリンピックと異なり、ろう者のための大会です。過去にはパラリンピックとの統合が検討されましたが、競技数や選手数の制限などの理由で統合は断念され、独立した大会として続けられています。

東京 2025 大会の大会エンブレムは、人々のつながりを意味する「輪」をテーマとし、デフコミュニティの代表的なシンボルである「手」と、デフリンピック開催の先に新たな未来の花が咲いていくことをサクラのモチーフをデザインして表現しています。このデザインはプロのデザイナーに依頼したものではなく、国内唯一の聴覚障害者、視覚障害者のための大学である、国立大学法人筑波技術大学の総合デザイン学科を中心とした産業技術学部の学生によるものです。

オリンピック・パラリンピックとは異なり、東京 2025 大会では選手村は設置されず、各国選手団は東京都内を中心に宿泊施設を利用予定です。そのため、宿泊施設、交通機関、飲食店などで一般の方々とのコミュニケーションが必要とされる場面が想定されます。ろう者とのコミュニケーションといえば、手話言語を使うと思われるかもしれませんが、手話言語を使わないろう者も一定割合います。また、手話言語は国によって異なります。大会では国際手話が用いられますが、一般の方々が街中でコミュニケーションする場合は、必ずしも手話言語を使う必要はありません。身振りやスマートフォンを使って、積極的にコミュニケーションを行うことができます。イタリア冬季大会でカーリング競技の会場となった小さなまちでは、筆談等でコミュニケーションをとりながら住民の皆さんが世界中から集まった大勢の選手団の人たちを応援していた様子が見られ、とても印象に残っています。

東京 2025 大会のボランティアは約 3,000 名を予定しています。募集条件として手話言語経験は問わないことにしました。手話言語ができる人だけをボランティア参加の条件にしてしまうと、「内輪」の大会に終わってしまうと考えたためです。これまで手話言語に触れてこなかった人にもボランティア参加を通して、ろう者の文化を知り、共生社会について考える機会となることが期待されています。

2．参加者からの質問

リアルタイムで参加者から質問を募るツールを利用し、参加者から質問を募り、倉野さんにお答えいただきました。

Q１：デフリンピック観戦を人に勧める場合、どの競技がおすすめですか？

Ａ１：日本がメダルを期待されている水泳、卓球、バドミントンなどがおすすめです。テレビ中継はなく、YouTube での配信が予定されています。

Q２：開催期間中に災害が発生した際の対応について教えてください。

Ａ２：東京都と協議し、モニター等で色や文字を使った情報提供、避難マップの配布、コミュニケーションボードの配布を検討しています。

Q３：子どもがこれからデフリンピック出場を目指す場合、デフの人が集まるチームに入った方が良いですか？

Ａ３：デフ競技団体への所属をおすすめします。例えば水泳なら「日本デフ水泳協会」などがあり、標準記録を掲げた選考大会を開催しています。

3．開催時の情報保障

Zoom の字幕機能の利用に加え、会場では手話通訳者 4 名にご対応いただきました。また投影画面にワイプで手話通訳者を表示し、情報保障に取り組みました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- デフリンピックを東京で開催することの意味や意義を知ることができた。
- きこえない人たちがいろいろな工夫を凝らしてスポーツを楽しんでいる事実や熱い思いを聴いて感動した。
- “デフ”の世界の一端に触れることができ、大きな学びになった。
- （きこえにくい人たちは）災害が起こったこと事態が分からない、ということに今まで気が付かなかった。
- デフスポーツについてもう少し知りたいと思った。
- 倉野さんがご登壇されたことで、デフの立場からの発信になったと思います。とても有意義でした。

企画・運営

高橋　義博（府中市市民活動センタープラッツ/Tripod）【主担当】
田中　祥子（デロイト トーマツ グループ合同会社）【副担当・報告書】

No.５　「予期しない妊娠」は私のせい？ PART1
～女性を取り巻く出産の現場から～

開催目的

妊娠した本人やそのパートナーが、妊娠したことや、子どもを産み育てることを前向きに受け止められず、支援を必要とする状況や状態にあることがあります。「予期しない妊娠」が児童遺棄や虐待死につながることのないように、私たちにできることはないのでしょうか？　まずはそんな現状を共に学び、一緒に考えてみたいと思います。

開催日時

２月８日（土）13:30～15:30

参加者数

４３名（参加者３５名：うち会場１７名、オンライン１８名、出演者１名、スタッフ４名）

出演者

姜　恩和（かん　うな）さん
（目白大学人間学部人間福祉学科　教授）

内容・成果・課題

講演では、「予期せぬ妊娠」をした女性の置かれている状況をさまざまな切り口から学びました。途中、事例をもとに、私たちならどう考えるかという視点で、グループごとに話し合う時間が持たれ、その問題の奥深さを体感しました。講演、事例の主な内容は以下の通りです。

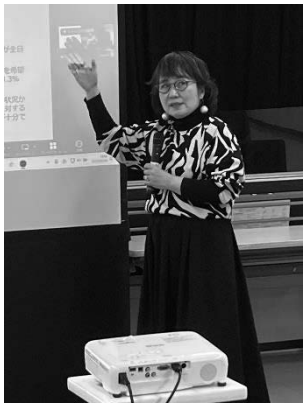
１．講演

（１） 子ども家庭を取り巻く環境について

10 代のＡさん、30 代のＢさんについての事例を通して、「予期せぬ妊娠」をしたときの女性の状況についてイメージを共有しました。

（２） 予期しない妊娠をした女性の状況

「『予期せぬ妊娠をした女性が出産を選択した場合における母子ともに安心・安全に出産できるための取組と出生した子どもへの支援に関する調査研究報告書』(厚生労働省　令和２年度子ども・子育て支援推進調査研究事業)」に基づき、女性の状況が報告されました。そこからは支援の切れ目にいる女性が、困難な状況に置かれていることが多いという様子が見えてきました。



（３） ０日児虐待死の状況

「『子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について(第 20 次報告)』社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会(2024)」に基づいて、心中以外の０日児の死亡事例が報告されました。それによると、病院以外で出産し、虐待の約９割は実母によって行われている状況が明らかになりました。

（４） 相談窓口と支援

全国で、妊娠 SOS 相談窓口設置の動きがあり、2015 年 11 月には全国妊娠 SOS 相談ネットが結成され、現在では 35 の都道府県に相談窓口が設置

されました。行政機関の設置する、児童相談所、保健センター、子ども家庭支援センター等と連携して支援が進められています。

（５） 10 代の妊娠と学業継続

文部科学省が「中高生の妊娠と学業継続に関する調査研究」の内容に基づき、「『公立の高校における妊娠を理由とした退学等に係る実態把握の結果等を踏まえた妊娠した生徒への対応等について』（文科省通知 2018 年 3 月 29 日）」という通知を出したことが報告されました。また目白大学で、「埼玉県・三重県・熊本県の小中高の性教育実態調査（2020 年 12 月 6 日～2021 年 1 月 22 日）」を行い、その内容が報告されました。

そこには、妊娠を理由に学業継続を図れない状況が明らかになっています。国として、「生徒の学業継続のための枠組みを明示すべきではないか」との先生の意見が添えられました。

（６） 社会的養護について

「予期せぬ妊娠」によって生まれてくる赤ちゃんは、母親が妊娠の否認をしていることが多く、施設ではなく、里親や養子縁組による家庭的な環境で育つことが望ましいとされています。しかしながら日本ではその割合が２割程度と低いことが課題とされました。

（７） 諸外国の支援について

ベビーボックスおよび内密出産も含めて、「予期せぬ妊娠」をした女性に対して、ドイツ、フランス、韓国ではどの様な支援が行われているのか、簡単に触れて頂きました。

２．事例検討

2024 年 10 月 7 日に、朝日新聞デジタルに掲載された「8 歳の息子を残し、外泊を繰り返した母へ　裁判官が最後に伝えたこと」の記事を各自で読み、事件になる前に、どんなことができたかについて考えて、グループで話し合い、全体でも共有しました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 女性を取り巻く生きづらい社会構造や学校組織の中で、妊娠した女性の人権を守る意識がまだまだ低いという現状に気付かされた。
- 韓国と日本の比較なども聞けてよかった。･･･グループ一人ひとりで着眼点が異なっていてとても有意義な時間であった。
- のぞまない出産についての現状を知りたいと思い参加しました。子育て支援で、虐待防止への観点から、特定妊婦への支援が言われる中、･･･地域でどのような事ができるのか考えさせられました。
- 私は男性なので女性の視点から妊娠のリスクや心理状況を説明してもらってためになりました。
- 妊娠すると赤ちゃんを優先的にするためほとんどの人が学校を辞めてしまうのは残念だと思いました。
- 学校に保育園とまでは言いませんが、せめて産んでからのフォローを学校で対応するとかして欲しいと思います。

企画・運営

秋田 正人（社会福祉法人賛育会）【主担当・報告書】
犬塚 尚樹（NPO 法人ふれあいの家 おばちゃんち）【副担当】

No.６　「無機質な住民」から「彩りある市民」へ
～まちあるきから考える！
まちの風景、今未来（いまみらい）～

開催目的

墨田・京島エリアは、昔ながらの町並みと古き良きご近所付き合いなどが残る大変魅力ある地域ですが、近年は再開発などでまちの様子が大きく変化しています。

本分科会では、まちあるきを通じ「誰もが住み続けられるまち」「支え合いのある彩りあるまち」はどうあるべきかを考えました。

開催日時

２月8日（土）１５：００～１７：００（フィールドワーク）

参加者数

１９名（参加者１３名、出演者３名、スタッフ３名）

出演者

後藤　大輝さん（日常福祉合同会社　共創担当代表社員・一般財団法人八島花文化財団　代表理事）
新井　尚恵さん（社会福祉法人墨田区社会福祉協議会　地域福祉活動担当主査）
佐藤　慶子さん（社会福祉法人墨田区社会福祉協議会　地域福祉活動担当主事）

内容・成果・課題

１．内容

（１）「誰もが住み続けられるまち」

関東大震災や東京大空襲時の被害が少なかったこの墨田区京島地域。大正・昭和初期の長屋があり、東京下町の風景が残っていることで有名です。最初に訪れたのは、大正時代創業の銭湯「電気湯」。この地域に住むご近所同士があいさつをかわす、何気ない日常がなんとも温かい雰囲気です。定期的にイベントも開催し、たくさんの人が訪れる交流の場にもなっています。

この地域に残る歴史と長屋の魅力に惹かれ、新たに移り住んだ人たちがいます。創作活動を行うアーティスト、研究のためのラボやカバン屋、シェアカフェなど飲食店を営む方、音楽家など、このまちは多様な人を寛容に受け入れています。

下町人情を大切にするキラキラ橘商店街の中ほどには卓球台があり、この地域の子どもから高齢者まで卓球をして楽しんでいます。この場所は、ハウスメーカーの住宅化を防いで、防災保有地化したスペースを活用し、「パブリックピンポン」として利用。大人も子どもも楽しめる場としてにぎわっています。

（２）「支え合いのある彩りあるまち」

キラキラ橘商店街の北側入口付近に「バーバーアラキ」があります。バーバーアラキは、その名のとおり理髪店でしたが、後藤さんが改修し、商店街に開かれた貸しギャラリーになっています。

「僕たちがここに移り住んできたときは、まちの人たちから奇妙な目で見られました。何か若い変わった人がいるけど大丈夫か、どうせイベントだけやって、出て行ってしまうのだろうと。僕たちもあいさつを重ね、この地域に馴染

むよう努力しました。最近では良い人だ、と言われています。そしてこのまちは、新陳代謝してどんどん良いまちになる」と住人のお二人からお話がありました。

商店街を横にそれると、墨田区社会福祉協議会が地域福祉プラットフォームとして運営する「キラキラ茶家」があります。お子さんから高齢の方まで、どなたでも気軽に立ち寄ることができる地域の居場所、世代間交流の場であるとともに、地域におけるさまざまな困りごとの相談に応じる「交流拠点と相談の場」です。地域住民の参加や協働の場づくりを通じて、住民相互のつながりを強いものにしています。

（3）本分科会で立ち寄った主な場所

電気湯、八軒長屋、二軒長屋、バーバーアラキ、海野貴彦商店、パブリックピンポン、京島劇場、キラキラ茶家、三角長屋、新築長屋、京島駅、大正長屋、四軒長屋、旧邸稽古場

2．成果

私たちが生活するまちには、さまざまなひとが住んでいます。特にこの京島地域は、長屋などの古い建物も多く存在し、大変魅力ある地域です。一方で、維持や活用ができずに空き家となってしまい、負の遺産にもなりかねません。

この長屋などを改築し、まちの魅力として活用することで新たな住民が住み、新たな絆が生まれます。若者と高齢者、日本人と外国人、新しい住民と昔からの住民。誰もが支え合い、安心して生活することのできるこの京島は、多様な人を受け入れ、まちが新陳代謝しています。新しいまちの姿、未来の姿について考えるきっかけとなりました。

3．課題

それぞれまちには特徴がありますが、私たちは地域の活動に無関心であることが多いと思います。地域でのつながりが弱くなり、支え合いの力が低下しています。多様な人とつながり、私たち住民が自ら参加し地域と関わることで、愛着のある彩りあるまちになります。多くの人が、少しでも自分の住む地域に関心を持ってもらえることが課題です。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 今回の街歩きを通して普段なら素通りしてしまうような場所にも物語があると気がつきました。自分が住んでいる街もよく見て面白い場所を探してみようと思いました。
- 将来の可能性が広がり、コミュニティについて学びになった。少子高齢化が進む中で住みやすい街に貢献したい。
- 京島の人たちが昔ながらの長屋を活かしながらも思い思いの場を作り上げている姿が印象的だった。

企画・運営

西島　雅行（江東区ボランティア・地域貢献活動センター）【主担当・報告書】
犬塚　尚樹（NPO 法人ふれあいの家　おばちゃんち）【副担当】
秋田　正人（社会福祉法人賛育会）【副担当】

No.７　学生サミット～団体運営に革新を～

開催目的

学生が集う場を設けたいという思いから分科会を企画しました。その際、多くの学生主体の団体が、活動内容そのものではなく、メンバーのモチベーションの維持、継続的な運営、資金調達、幹部の動きといった「運営面」に課題を感じているのではないかと考えました。

そこで、「学生団体の運営の工夫や課題の乗り越え方」を学び、自分たちの活動に活かせるアイデアや解決策を見つけるために本分科会を企画しました。本分科会が、学生団体の未来を見据え、市民社会における役割を再確認し、新たな挑戦へと踏み出すきっかけとなることを願っています。

開催日時

２月８日（土）１６：３０～１８：３０

参加者数

25 名（会場参加者９名、出演者２名、スタッフ６名、ボランティア８名）

出演者

池田　大和さん（NewColumbus グループ　代表）
山岸　荘汰さん（学生団体　おりがみ　代表）

内容・成果・課題

１．お二人の自己紹介と、団体の紹介

（池田さんのお話）

学生団体ニューコロンブス(以下ニューコロンブス)は、2020 年に発足し、高校生から社会人までの 161 名が活動しています。「可能性のスタート地点」をニューコロンブスの活動の中心に置き、鎌倉市を拠点に、神奈川県内や全国へと活動の幅を広げています。ニューコロンブスが他の学生団体と大きく違うところは学生からお金を集めないことを徹底していることです。活動資金を得るためにスポンサー制度を導入し、単に企業から支援を受けるのではなく、企業とのコラボイベントを開催することで WIN-WIN な関係を築いているとのことでした。13 の分野に分かれ年間 150 件以上のイベントを実施し、居場所づくりや MIIGO（ゴミ拾いイベント）を通じて、世代を超えたつながりを生み出しています。

（山岸さんのお話）

学生団体「おりがみ」は、「オリンピック・パラリンピックを学生みんなで盛り上げよう」の頭文字を取って名付けられた、発足 11 年目の団体です。全国 80 以上の大学から 400 名以上の学生が集まり、「面白そう！から始まる共生社会」の実現を目指して活動しています。山岸さん自身はもともとボランティアに関心がなかったそうですが、「自分の学びや取り組みが誰かのためになり、それが社会のためにつながるのがボランティアの理想的な形」と考えるようになったと話していました。

活動は６分野・23 のプロジェクトチームに分かれており、年間 100 本以上の企画を実施。「新しい刺激や情報を得ることで、自分自身の可能性を広げられる」と考え、参加者に対して「自分の作ったレールを一度取り払って、新しいレールを築くことで、学生生活がより充実する」と語りました。

２．質疑応答

司会が登壇者にインタビューする形式で行いました。

Q1 活動に参加した経緯と，組織内の役割について教えてください。

A 池田さん：小さい頃から地域に関心があり、習い事やお祭りを通じて地域の方々と交流する機会が多かったです。高校生になり、地域に恩返しする方法を模索していた際にニューコロンブスと出会いまし

た。団体名は、「大航海時代のコロンブスのように、自分たちで新しい地図を作ろう」という理念に由来しています。組織全体を船に例え、幹部を「操縦室」、代表を「船長」と呼んでいます。

山岸さん：大学生になり「自分は何者になれるのか？」という問いに向き合い、さまざまな活動の一つとしておりがみに加入したのがきっかけです。もともとボランティアに否定的でしたが、おりがみの活動やメンバーに愛着が湧き、YES or はいの精神で代表に就任しました。おりがみの組織は学校運営に例えられることが多く、地域別の支部、運営を担う部署、プロジェクトチームに分かれています。多くのリーダーを立て、組織全体に目が行き届くようにしています。

Q2 みんなで組織を作るうえで大切にしていることは？
A.池田さん：「楽しみたい！　このメンバーと活動したい！」という純粋な気持ちを大切にすることです。活動の中で困難に直面することもありますが、その先にある笑顔や達成感をみんなで分かち合うことが、活動の楽しさにつながると考えています

山岸さん：「『おもしろそう』からはじまる共生社会」という理念が浸透し、共通の価値観になっていると考えています。「学生だからできる／できない」と決めつけず、「やってみたい！」という想いをみんなで形にすることを大切にしています。そのために、活動年数や学年に関係なく、全員の意見に耳を傾けるようにしています。

３．グループワークとグループごとの発表

６ 人班に分かれ，登壇者のお二人にも参加していただきグループワークを行いました。アイスブレイクに自己紹介しりとりをして、初めて会う参加者も打ち解けていた様子でした。「マッキンゼーの７つのS」を参考にしたワークシートを用いて自己分析と組織分析を行いました。自分の想いを言語化する中で浮かんだ悩みを相談したり、他の団体の運営や活動と自分の団体を比較したり、有意義な交流の時間になったと思います。

グループごとに今日の学びを発表していただきました。夢を語る方もいらっしゃれば、個人の好きや趣味で終わらせずに社会問題と結びつけてどう行動できるのかを伝える方、さまざまな人の考えを聞く中で新しいつながりの糸口を見つけた方や、机上の論争で終わらせるのではなくどうアクションに移していくかが課題だと伝えてくださる方もいらっしゃいました。みなさん共通して新しさやより良い社会に向けてどんな行動ができるのかと、社会問題の自分ごと化をしていることが印象的でした。

４．成果と課題

学校種や地域の垣根を越えて学生がつながる場所をつくれたことはとても良かったと思います。自分の所属している組織を振り返るとともに、新しい運営の仕方や他の団体の活動を比較し、参加者のみなさんの活動の幅が広がったのではないかと感じました。若者のチャレンジを行政がどのようにして支えているかなど、若者を支援するネットワークを当事者に伝える活動もしなければならないなと感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 様々な活動があることを知った。自分たちの活動と直接関係がなくてもアイデアをいただけてとても参考になった。
- 団体のマネジメントの仕方や学生のコミュニティのこれからを考える良い機会になったなと思います。組織形態に関しては他の団体のはなかなか見ないので、勉強になりました。

企画・運営

秋本　美帆（中央大学）【主担当・報告書】
冨沢　陽翔（順天堂大学）【副担当】

No.８　場づくりのいろは～居場所づくりで大切な事とは～

開催目的

地域活動の一歩として「居場所づくり」を考える方が多くいる一方で、立ち上げるにあたりハードルが高く、何から始めたらいいのかわからない方も多いです。場づくりのいろはを学びながら「居場所」について考える機会にしたいと思い、企画しました。

開催日時

２月8日（土）１６：３０～１８：３０

参加者数

５６名（参加者４６名：うち会場３２名　オンライン１４名、出演者３名、スタッフ６名、ボランティア１名）

出演者

西川　正さん（NPO 法人ハンズオン埼玉　副代表理事）
廣瀬　貴樹さん（一般社団法人かけはし　代表理事）
小池　良実さん（岡さんのいえ TOMO　オーナー）

内容・成果・課題

１．内容

（１） 西川さんより「居場所」について話題提供

「居場所」はとても広い概念で様々な形があります。例えば、Ａ：常設の場所を民間で、Ｂ：常設の場所を官営で、Ｃ：常設ではない場を民間で、Ｄ：常設ではない場を官営で という形で分けられると考えます。居場所とは何かを考えた時「居場所をつくる」と言いますが、その場所が「居場所になる」という表現もあります。どんな視点で居場所を見るかで、場のあり方は変わります。

（２） 実際に居場所を運営する中での経験や課題等

廣瀬さん：小学校の元教員をしていた時の経験から、子どもの思いを大事にすることを学び、学校に居場所を持てない子がたくさんいることにも気づきました。一教員として生きていくのではなく、一人の安心のために場をつくろうと思い教員を辞めました。

居場所をつくる時、地域との信頼関係なくして居場所づくりはできません。行政にも補助金等の相談をしましたが、前例と実績がないと断られました。子どもたちと保護者の皆さんに寄り添い続け実績を作っていきました。さまざまな媒体を通して理解を広め、今では 70 名以上の子どもたちが通っています。

私たちは「土になりたい」ということを大切にしています。私は５つの畑を借りていて、同じ時期に５つの畑に種をまくと色んな育ち方をします。一番育った畑は「土」が良かったのです。「土」という縁の下の力持ちになり「知ること・待つこと・認めること・つながること、つなげること」を大事にして、子どもたちが自分の意思で乗り越えていけるようサポートしたいと思っています。地道に一歩一歩、信頼関係を構築するためには「発信」と「対話」を続けるしかありません。子ども・保護者からの心の声を受け止め、学校・行政・地域の方々と話し合いを重ねることが大切です。

小池さん：岡ちとせさんの築 75 年の家を譲り受け活動しています。始めた頃は近所の方が訪ねてきて“何をしているかわからない”という声もありましたが、試行錯誤し、今では多世代の場になっています。年代、専門性、属性の違う人が関わるからこそ、楽しく活動できていると思います。コツは「混ざったら放置」。放置すると様々な発見や発展が出てくるのも場の良さです。

小さいけれど大切なエピソードがあります。数年前に“私、死にたいんです”という高齢女性が来ました。“〇〇線の線路で寝るか、ここに来るか迷ってここに来た”と。お屋敷のような家で豊かな生活をしているように見えましたが、家族と上手くいかず孤独を深めていました。場所を開いていればそうした人が立ち寄れるとわかり、地域包括支援センターと相談し「まちの保健室カフェ」を始めました。

つながり続けることが活動を継続する上で大切です。個人的な思いで始めた場所ですが「できることを、できる人が、できる分だけ、できる時に」とやってきました。来る人がバラバラだからこその「ま、いっか」は大切です。変化し続ける「場」とゆるくても長く付き合ってほしいと思います。

2．質疑応答

Q. 学校の中で子どもを守ることが難しいと判断して新たな場を作ったのでしょうか。

A. 廣瀬さん：教員として子どもたちが、苦しみ葛藤し悩んでいる姿を見てきました。様々な背景があり、学校だけで支援していくには限界があると感じました。地域で子どもたちのためにできることをするという選択をしました。皆、踏ん張ってやっている、その一つになりたいと思いました。

Q. 児童養護施設退所後の子の食事会と中高生の居場所（受託事業）を始めた経緯を知りたいです。

A. 小池さん：近くに児童養護施設があり、岡さんが存命の時から関わりがありました。ご縁で一緒に何かできたら良いなと考えていた矢先に事業の話がありました。何をするにしても「岡さんならどうするか」を常に考えて活動しています。

3．グループワーク

話を聞いた上での感想や、居場所をつくる上での気づきについてグループで話し合いました。

「作りこみすぎないように作りこむ」という非常に難しい舵取りが求められると感じました。／世代間交流の中で次の人を育成しながら永続的に運営していくことに課題を感じました。／廣瀬さんの話に共感するとともに、学校教育ではない新しい場のあり方も模索していることに刺激を受けました。／地域活動のために活用・開放できる場所が自宅にあるので「岡さんのいえ」を参考にしたいです。

【コメント】

廣瀬さん：立ち上げた原点も大事ですが、色んな人が入ることで変化していくことも大事です。より暖かさが増したり、場の良さや可能性が広がっていくと思います。

小池さん：他の団体の方が「こういう活動って社会を明るくして、家庭を暗くするのよね」と言っていましたが「社会も明るく、だけど、家庭もぼんやり明るくないとね」と思います。「これが好き」を選んで活動してきました。それが大事な原動力です。後継者も最初から考えると上手くいきません。そういう存在が出てくれば良いなとゆるい気持ちで考えています。

4．成果と課題

「居場所」の大切さを知る機会になったと思います。“誰かのために場所をつくりたい”“誰かの思いを実現したい”という思いが原動力・活動の柱になり、継続した活動ができていると、お二人の話を聞き感じました。一方で、参加者から「人・場所・資金・地域への理解」の課題で悩む声もありました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 「やってあげる」ではなく「一緒に楽しむ」姿勢を忘れないように心がけたいです。
- 社会や学校にどこかしら、一人でも居場所にできる隙間、ゆとり、余地、空白、余白があることも大事だと思いました。誰でもどうぞと開かれている場も必要だと思います（軒下やベンチ等）。

企画・運営

橋本　碧（練馬ボランティア・地域福祉推進センター）【主担当・報告書】

佐藤　純（NPO 法人 Hand Over Japan(HOJ)）【副担当】

No.９　「予期しない妊娠」は私のせい？ PART2
～女性を取り巻く出産の現場から～

開催目的

「予期しない妊娠」をしてしまったとき、社会でどのように支えていけば良いのでしょう？　2014 年からこうした女性や子どもに寄り添い、日本各地の支援団体の支援も行っているベアホープさんの最前線からのレポートに耳を傾けたいと思います。そして私たち一人一人の日常生活の中で何ができるのか、どんな一歩を踏み出せば良いのか、ともに考えたいと思います。

開催日時

２月８日（土）１６：３０～１８：３０

参加者数

３３名（参加者２４名：うち会場１６名　オンライン８名、
出演者３名、スタッフ４名、ボランティア２名）

出演者

【報告者】
森崎　智恵子さん（一般社団法人ベアホープ　保健師）
三浦　杏子さん（一般社団法人ベアホープ　助産師）
【ファシリテーター】
姜　恩和（かん　うな）さん（目白大学人間学部人間福祉学科　教授）

内容・成果・課題

１．ベアホープについて＜森崎さん・三浦さん＞
（１）子どもの置かれている状況
- 2022 年度の児童虐待の状況について報告がありました。こども家庭庁「子ども虐待による死亡事例の検証結果等について（第 20 次報告）」による、児童虐待死亡件数（心中以外の虐待死）は、18 歳未満の子どもで、56 人が命を落としました。そのうち０歳児は 45%の 25 人、さらにそのうち、60%にあたる 15 人が０歳０ケ月で亡くなっています。
- 全国で 500 人に 1 人の子ども（約 42,000 人）が社会的養護を必要としていて、そのうち約 80%の子どもが、施設で過ごしているという状況が報告されました。里親・ファミリーホームで過ごす子どもは約 20%、さらに特別養子縁組が成立するケースはわずか 1%とのことでした。

（２）ベアホープについて
ベアホープは、「すべての子どもが、愛ある家庭で育つことができる社会を実現する」ために活動をされていて、現在は、妊娠・養育相談事業、養子縁組事業など４つの事業を行っていることが紹介されました。

２．（グループワーク）自己紹介・アイスブレイク＜三浦さん＞

３．（グループワーク）「予期せぬ妊娠」って、私のせいなの？＜森崎さん・三浦さん＞
２つの事例について、「あなたがＡさんだったら、どんな気持ち？　どうする？」「あなたがＡさんの友達だったら、どんな気持ち？　どうする？」という問いをもとに、グループで話し合い、共有しました。発表後、講師からそれぞれのケースの実際の背景やその後の経過について説明がありました。

４．その背後にあるものは？＜三浦さん＞

２つの事例を通して、「予期せぬ妊娠」は、私のせいと言い切ることはできないのではないか、ということが共有されました。「予期せぬ妊娠」の背後には、DV や家庭内暴力、貧困等のさまざまな要因があり、それらが歯車のように絡み合って回り出してしまうことにより、「予期せぬ妊娠」が起こると考えられます。そしてその歯車を止めるためには、誰かの言葉がけや愛されている、大切にされている実感、過去のあたたかい思い出が、まるで歯車を止めるような板や棒になりうるのではないでしょうか。そういった意味で、専門機関だけではなく、私たちも身近なところで力になれることがあるかもしれません。

５．支援の実際＜森崎さん＞

ベアホープには本人からの相談が一番多いとのことでした。そして妊娠がわかった瞬間から、その不安に寄り添いながら出産のサポートを行い、出産後は、実母の気持ちに寄り添いながら、子どもの養育や実母の生活について一緒に考えている様子が報告されました。また特別養子縁組・普通養子縁組・里親の違いや、特別養子縁組の流れを共有しました。

６．まとめ

今日の話を踏まえて、私たちは自分の立場で何ができるのか、またどんな制度や社会であったら良いのかについて、グループで考え、全体で共有しました。

７．コメント＜姜さん＞

PART1 の内容を踏まえて、PART2 では事例に基づいて、またさらに具体的に噛み砕いて考えられる時間でした。歯車をどういうふうに止められるか、そのためには私たちがこうした状況をきちんと認識したり、こうしたフォーラムを通して運動したり、あるいは制度の改善を要望していくこともあると思います。どうやって負の歯車を止められるか、それを止められるのは何かということを、これからも一緒に考えていきましょう。

参加者の声（アンケート結果などから）

- いろいろな立場や年齢の方がいたようなので、皆さんが少しずつ広げてくれる…私も自分の立場でできることを！　と改めて思いました。
- 緊急下の女性にとって中絶、出産→養子縁組、どちらの選択をしても苦しい気持ちになると思う。どちらの選択をしても、よく考えたうえでの判断なので、その女性のこれからの人生を後押しすることが大切だと感じた。
- 中絶する権利に対比する形で、これがあったら育てられたのにという権利に言及されていたのが印象的で素敵な言葉だなと思いました。妊娠出産は特に女性にとって大きな出来事なので、自分が後悔しない決断ができる環境が整っていることが必要だと感じました。

企画・運営

秋田 正人（社会福祉法人賛育会）【主担当・報告書】
犬塚 尚樹（NPO 法人ふれあいの家 おばちゃんち）【副担当】

No.１０　交流会「カフェ＆バル VAMOS」

開催目的

分科会の時間だけでは話しきれない！！ もっと参加者同士で話したい！ そんな参加者の皆さんや出演者、実行委員などが、会場で飲食（アルコール含む）しながら自由に語り合える場として企画しました。また、2024 年の交流会実施時に作成したミライカプセルを開封しました。

開催日時

２月８日（土）１９：００～２０：３０

参加者数

５９名（参加者２９名、スタッフ２５名、ボランティア５名）

内容・成果・課題

今年は参加者同士の交流をより深めることを強めたく、会場のみで交流会を開催しました。昨年までは会場とオンラインのハイブリッド形式で開催しましたが、オンラインでの参加人数が大幅に減ったこともあり、会場のみの開催にしました。また、今年は参加費として 500 円を徴収し、VAMOS な料理、飲み物（アルコール含む）を用意して開催しました。

最初にアイスブレイクとして、参加者同士で自己紹介をして９マスの枠に相手の名前を入れ、ビンゴゲーム形式でゲームを行っていく名前ビンゴをしました。限られた時間内で参加者と自己紹介などを通して相手のことを知るよい機会になりました。

次にグループに分かれて、「自己紹介」と「ボランタリーフォーラムに今回なぜ参加したのか？」を共有してもらいました。

最後に、フリートークとして会場参加者同士でそれぞれ交流を深めてもらいました。さらに、2024 年の交流会実施時に作成したミライカプセルを開封し、ミライへの自分へのメッセージを共有しながら、フリートークが盛り上がりました。

ボランタリーフォーラムの目的の一つに「交流」することがあります。交流会をオンラインでも開催することによって参加者の裾野は広がるが、参加者同士の交流の難しさは課題となっていたため、今年は会場のみにすることで、誰もが気軽に交流できる場が実現できたと考えています。

企画・運営

犬塚　尚樹（NPO 法人ふれあいの家　おばちゃんち）【報告書】
岡田　まどか（光明第二保育園）
鹿住　貴之（認定 NPO 法人 JUON(樹恩) NETWORK）
久保　賢人（中野ボランティアセンター）
櫻井　佑樹（認定 NPO 法人 難民を助ける会（AAR Japan））
中村　達也（なぎさ和楽苑）
橋谷　優希（日野市ボランティアセンター）
太田　学（東京ボランティア・市民活動センター）

No.１１　「親なきあと」を考える
～老障介護の現実と課題について～

開催目的

障がい分野の高齢期における課題として「親なきあと問題」というものがあります。講師の方による「親なきあと問題」に潜む様々な課題の解説および解決に向けた取り組み事例の紹介を通して、市民の立場で障がいのある方や周囲の方を支える方法や取り組みを模索することを目的に開催しました。

開催日時

２月９日（日）１０：００～１２：００

参加者数

３６名（参加者２６名：うち会場１６名　オンライン１０名、出演者４名、スタッフ６名）

出演者

吉川　かおりさん（明星大学 人文学部福祉実践学科 教授）
杉田　泉さん（NPO 法人江戸川区相談支援連絡協議会 主任相談支援専門員／東京都障害者相談支援体制整備事業 特別アドバイザー）
川島　真紀さん（NPO 法人江戸川区相談支援連絡協議会 主任相談支援専門員／日本精神保健福祉士協会 代議員）
溝部　奈緒さん（NPO 法人江戸川区相談支援連絡協議会 相談支援専門員／江戸川区自立支援協議会 地域生活支援拠点部会委員）

内容・成果・課題

1.　吉川さんからのインプットとグループワーク

1980 年代頃は、障がいのある子どもを持つ家族に対する福祉サービス体制が不十分で、「家族が責任を持って本人をケアする」風習が色濃い時代背景でした。現在は福祉サービスが充実し始めていますが、情報が行き届いておらず、障がいのある当事者の意思決定が困難なため、親の意見が優先され、家族で課題を抱え込んでしまう傾向が強いのが現状です。子どもの成長段階において、本人の自立に向けた生活スタイルが上手く構築されず、様々な問題（ヤングケアラー・虐待等）が発生するケースもあります。親が周囲を頼らず、子育ての責任を抱え込んでしまい、「子どものことは自分が一番知っている」と、子どもの自立を阻害してしまう実態も生じています。

このような悪循環をなくすため私たち市民に何が出来るのか、いかにサポートをしていくのかをテーマにグループワークを行いました。参加者からは、「周りにいる私たちが手を差し伸べることが大切」「ヤングケアラー・虐待等が起こる状況の背景には、社会的な構造の要因が大きく関わっており、親御さんだけの問題ではない」といったことが述べられました。

親が子離れのための生活が出来るかが課題解決のポイントであり、そのためには親が子のアイデンティティを受け入れる（障がいを持っていても自立は出来る。障がいのある人たちも１つの人生を持っている一個人である）ことが重要です。子どもの「保護」から「見守り」へスタンスを変化させていくことが求められ、子どもの自我を大事に親が子に対しての身体的・精神的な分離を進めていくことが必要となります。子ども自身が、親に見せる顔だけでなく、地域に関わることで親の前以外で見せる顔を育てていくことが自立へと繋がる支援となります。

2.　社会福祉法人東京栄和会 なぎさ和楽苑取り組みについて

中村さんより「特定相談支援事業・障害ショートステイ」について紹介されました。

⑴ 同事業所内に介護保険のケアマネージャーも在籍。障がい者支援から介護保険へのスムーズな移行が可能。親が要介護状態、子どもが障がい者であるケースでも世帯支援の視点を持ち、1 人の支援者による全体のコーディネート、境目のないシームレスな支援が可能。
⑵ 施設の強みを活かし高齢者だけでなく障がい者のショートステイの受け入れ。介護保険を利用されている方と同日での利用も可能。受け入れにあたり、元々が高齢者施設であるため、設備面やケアの部分について体制を整えている段階にある。

3.　江戸川区相談支援連絡協議会の方々から事例共有とグループワーク

実際にあった相談ケースの事例 4 つをあげて、家族の状況、相談者の対応、各機関との連携や、社会資源を活用した支援方法等を詳しく解説し、事例を踏まえた上でお話しいただきました。これを受け、「私たち市民に出来ることは何か」をテーマにグループワークを実施しました。以下の通り、多数の意見が述べられました。

SNS の活用を充実させると良い／地域の連携が重要／実際に障がいを持つ家族としては、根深い問題であり表面に出しづらい／様々な障がいに対して具体的な相談が出来るソーシャルワーカーを整備して欲しい／障がいについての理解と学ぶ機会を設ける風土作りが求められる／学校の教育の場面で取り入れることで、幼いころから障がいに対する学びと触れる機会を設けてみても良い／海外からの働き手も増えていく中、多様性を踏まえて、地域共生社会を築いていけたら良い／日野市では福祉教育ハートフルプロジェクトを開催している。子ども達が変わると大人も変わるきっかけとなる。

4.　成果・課題

参加者には実際に障がいをお持ちの親族の方もいらっしゃり、当事者の方々が抱える悩みや、社会に対しての希望といった貴重な意見もいただくことができました。また、障がい者を取り巻く課題について、理解を深める機会になったことがグループワークの感想やアンケートからも読み取れました。実際にはまだ世間の理解や認知度が希薄である現状も浮き彫りとなり、これから私たち市民が取り組めることは何かを考え、それぞれの意見を共有する良い機会となりました。障がいを持つ方が地域に馴染みやすい環境作りとその家族への支援も含めた包括的な支援体制を考えていける地域共生社会を目指すきっかけとなって頂けたら嬉しく思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 家族のため知見を深めたくて参加した。期待以上のものを得ることができ本当に参加してよかった。
- 一人一人の小さな意識変化から難しい問題を解決していく視点の重要性を知れた。
- 政策的に解決が難しいテーマだが、地域にたくさんある課題なので話を聞けて良かった。もっと当事者の方から話を聞ける機会があれば良いと思った。
- グループディスカッションに高校生などの若い方が参加していたことや、日野市の「福祉教育ハートフルプロジェクト」に、将来の希望の光を見る思いがした。
- まずは自分が自分の地域と繋がって、自分の子どもや知人を地域と繋げていく架け橋になります。

企画・運営

中村　達也（なぎさ和楽苑）【主担当・報告書】
橋谷　優希（日野市ボランティアセンター）【副担当】

No.１２ 大人が変われば子どもも変わる
～アンコンシャス・バイアスを知ろう！～

開催目的

現代社会において、無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）は、子どもの成長や教育環境に大きな影響を与えています。大人が持つ価値観や先入観が、知らず知らずのうちに子どもたちの可能性を狭めてしまうことも少なくありません。

本イベントでは、「アンコンシャス・バイアス」について学び、私たちがどのようにそれに気づき、変えていくことができるのかを考えます。大人自身が意識を変えることで、子どもたちがより自由に、自分らしく成長できる社会を目指します。

子どもの未来のために、まずは大人から変わらなくてはなりません。子どもたちの未来のために考えましょう。

開催日時

２月９日（日）１０：００～１２：００

参加者数

２２名（参加者１６名：うち会場８名　オンライン８名、スタッフ５名、ボランティア１名）

内容・成果・課題

１．みんなで考えよう

本分科会では、アンコンシャス・バイアスについて学び、参加者同士が対話を通じて気づきを深めることを目的としました。ただ講義を受けるのではなく、「みんなで考え、みんなで気づき、みんなで語り合う」ことを大切にしました。

まず、アンコンシャス・バイアスとは何かを知ることから始まりました。「無意識の思い込み」は誰にでもあり、それが子どもたちの成長や可能性にどのような影響を与えるのかを考えました。その後、具体的な事例をもとにディスカッションを行い、「子どもたちの未来のために、大人ができることは何か？」について意見を交わしました。

2. 成果

今回の分科会では、多様な視点から意見が出たことが大きな成果でした。

・参加者が異なるフィールド（教育、スポーツ、施設など）で活動しているからこそ、さまざまな意見が飛び交い、多角的な視点で物事を考えることができました。「自分の環境では気づかなかった視点を知れた」という声も多く聞かれました。
・アンコンシャス・バイアスについて深く考えるきっかけとなったことも大きな収穫でした。参加者の中には「今まで意識したことがなかったが、これからは気をつけたい」という意見や、「自分自身の発言や行動を振り返る機会になった」という感想もありました。
・「子どもたちにとって本当に有意義なこととは何か」「子どもたちが一番幸せになる環境とは何か」を改めて考えるきっかけになりました。アンコンシャス・バイアスに気づくことが、子どもたちの成長を支えるための第一歩となることを実感しました。

3. 課題

一方で、今後の課題も浮き彫りになりました。

・大人自身が変わることの重要性

アンコンシャス・バイアスをなくすことは難しいですが、それに気づき、向き合うことが大切です。しかし、それを実行に移すのは簡単ではなく、「大人が変わることの難しさ」を改めて感じました。

・考えるだけではなく、行動へ
　「気づくこと」が大切なのは間違いありませんが、それだけでは十分ではありません。参加者からも「知識を得ただけで終わらせず、具体的に行動に移す必要がある」という声が上がりました。
・これからが大事
　分科会を通じて多くの学びや気づきがありましたが、これを継続していくことが重要です。「今日話したことを、明日からどう実践するのか？」が問われます。今回の学びを各自の現場に持ち帰り、それぞれの環境でどう活かしていくかが、今後の課題となります。

4. まとめ
　「大人が変われば子どもも変わる」。これは簡単なことではありません。しかし、まずは気づくこと、考えることから始まり、それを行動に移すことが何よりも重要です。今回の分科会で得た学びを、日々の生活や仕事の中で実践し、少しずつでも環境を変えていくことが、子どもたちの未来につながるはずです。
　これからも「考える」だけで終わらせず、一歩踏み出して「行動する」ことを大切にしていきたいと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

・司会の皆さんの経験や参加者同士でのディスカッションを通して、身近に感じるバイアスだけでもこれだけのことがあるのだなと実感しました。
・無意識の偏見はなくなることはないけれど、本質を常にみようとする意識、積極的に関心をもつことが大切だと思う

企画・運営

竹島　孝俊（GONA）【主担当・報告書】
岡田　まどか（光明第二保育園）【副担当】

No.１３　多文化共生×街角－コインランドリー・量り売り・カフェ 生活の場からの出会いを考える－

開催目的

本分科会は、多文化共生領域と「街角」の掛け算から、新しい出会いや対話を作ることを目的に実施しました。色々な領域で、その領域にもともと関心がある人だけが集い、新しい層の人たちとつながりきれていないのではないかという課題があります。それを超えていくため、生活の場である街角で、コインランドリーや量り売り・カフェなどコミュニティビジネスの実践者と参加者が集い、多文化共生領域の視点も交差させた対話を行いました。

開催日時

2月9日（日）１０：００～１２：００

参加者数

３１名（参加者２３名：うち会場１９名　オンライン４名、出演者２名、スタッフ５名、ボランティア１名）

出演者

山田　麻理子さん（WELLSIDE ランドリー）
藤田　恵美さん（量り売りとまちの台所 野の）

内容・成果・課題

１．内容
（１） この分科会の趣旨説明
（２） ２名の登壇者からの実践報告
（３） グループに分かれての意見交換
（４） 参加者と登壇者との全体ディスカッション
（５） 質疑応答

２．実践報告
（１）　藤田恵美さん（量り売りとまちの台所 野の）

合同会社「野の」は、三鷹武蔵野地域の市民の手で地域という小さな範囲から、自分たちのペースで地球環境や人・モノ・社会とのつながりをつくり直すことを通して、暮らしの豊かさと向き合える場を共につくっていきたいという思いからはじめられました。

８人の仲間が集い（ゆくゆくはワーカーズコープを目指している）、その思いを実現する入口として量り売りのお店をされたとのことです。立ち上げのために、他の地域の量り売りの実践を見学に行かれた話や、物件探し、その後の商品開発などのお話がありました。

藤田さんは、今後、仲間や地域の方と色々と話しながら、三鷹武蔵野地域における循環のプロセスを作り出せるようなお店にしていきたいとお話がありました。

量り売りとまちの台所 野の

（2）山田麻理子さん（WELLSIDE ランドリー）

東京都北区のビジネスプランコンテストを受賞されたときのプレゼンをもとに活動についてお話がありました。

山田さんがコインランドリーをはじめられたのは、ご自身の実体験があったからとのことです。保育園に入れず引越しを考えたことや育児と家事の大変さを感じ、地域に根差したコインランドリーを作りたいと考えたとのことです。

地域の子ども食堂との出会い、ご夫婦で色々なコインランドリーを実際に訪問されたこと、物件取得や色々なアクシデント、また、地域の商店街とのつながりなども含め、お店立ち上げのプロセスについてお話がありました。その上で、山田さんからは、このコインランドリーは、忙しい共働き家庭のひとが、自分だけで頑張りすぎない、無理なことはできる人にお願いをして、自分も大切にしながら、大切な人を大事に出来る、そんなお手伝いをする場所にしたいとお話がありました。

WELLSIDE ランドリー

その後、会場では参加者のみなさんがテーブルごとに、オンライン参加者はブレイクアウトルームに分かれて話を聞いたうえでの感想などについて意見交換を行いました。続く、全体ディスカッションでは「多文化共生」×街角の視点からも、登壇者と参加者の間で意見交換を行いました。

3．成果

参加者から「出会いの場、場作りとして生活に根付いた場所の可能性を感じました」という意見がディスカッションからも多く聞こえてきました。本分科会を通して、生活の場としての街角での実践を示し、地域で新しい層の人たちとつながりをつくる実践を共有できたこと。また、分科会参加者同士のつながりづくりができたことが成果です。

4．課題

街角での新しい出会いという視点の議論や共有はできましたが、地域に暮らす多様な言語・文化背景を持った外国人住民との共生をめざす「多文化共生」の視点での「×（掛け算）」についての議論は深くはできませんでした。この実践は、今回ご登壇いただいた２つのお店の場所を借りるなどして、実際の地域で、そこに暮らす人たちと一緒に今後できたらよいと思いました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 身近にないコミュニティの場を作られている方の話が聞ける貴重な機会となりました。ビジネスとしても取り組みや課題も伺えて良かったです。暮らしが地域をよくする、活性化することの大切さがあることに共感しました。
- コインランドリーがサードプレイスとして活用できる、という話はとても興味深かった。コインランドリーは待ち時間があるため、その余白が様々な価値を生み出せるのだということに可能性を感じた。自分も居場所を考えるときに、日常生活（ライフ）の延長線上に設けることが大切なのだと感じた。

企画・運営

新居　みどり（NPO 法人国際活動市民中心(CINGA)）【主担当・報告書】

犬塚　尚樹（NPO 法人ふれあいの家 おばちゃんち）【副担当】

No.１４　セカンドライフを充実させる ボランティア・地域活動のコツって何だろう？

開催目的

「人生 100 年時代」と呼ばれている昨今で、中高年は自分らしい新たな生き方を求め、様々な活動を行っています。ボランティア・地域活動の観点では、活動の担い手不足が指摘されていますが、中高年を活動の担い手として、期待している地域の声があります。一方で、なかなかその活動が見つからない中高年や、中高年と地域やボランティアグループを結ぶコーディネートが難しい、あるいは上手くいかないと感じている中間支援組織のコーディネーターの存在があります。

そこで、この分科会では、ボランティア活動や地域活動を「セカンドライフ」として取り組まれている中高年の方や、活動に携わった中間支援組織のコーディネーターからのお話や事例を通し、「セカンドライフ」を充実させるコツやコーディネートの工夫について、参加者同士で一緒に考えたいという思いから本分科会を企画いたしました。

開催日時

２月9日（日）１０：００～１２：３０

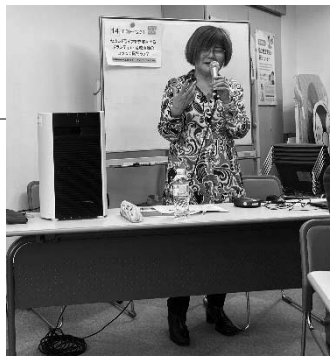
参加者数

３２名（参加者２１名、出演者３名、スタッフ６名、ボランティア２名）

出演者

妻鹿　ふみ子さん（東海大学健康学部健康マネジメント学科 教授/日本ボランティアコーディネーター協会）
樋口　宗典さん（社会福祉法人横浜市港南区社会福祉協議会　事務局次長）
中井　政男さん（セカンドライフ大学校(3 期生)OB「輝(かがやき)」所属）

内容・成果・課題



１．妻鹿ふみ子さんからの話題提供

妻鹿さんから、データを用いながら、近年の日本における地域社会の動向についてご講義いただきました。
①どの年代であっても、ボランティア活動に参加する割合は諸外国に比べて低いこと、②地域社会から「孤立している」と回答する人の割合は、日本は諸外国に比べ高いことをお示しいただきました。

とりわけ、これまで地縁組織や隣近所が担っていた「自助」や「互助」と呼ばれる地域とのつながりや支えあいの仕組みが、人口減少や社会構造の変化から少なくなってきました。一方では、地域の福祉課題は複雑多様化してきており、新たな支えあいの仕組みが必要とお話くださいました。

例えば「サードプレイス」と呼ばれる、身近なカフェや居酒屋のような居心地の良い空間、スポーツや趣味の活動を通した特定の小地域における「特定の（親密な）コミュニティ」を私たちは求めており、これからの地域では、それらが成立するような新たな支えあいの仕組みが必要であると、妻鹿さんは話されます。その形成過程では、いわゆる「支援する側」と「される側」の関係性が、ボーダーレスでフラットな関係性が重要であると提起がされました。

このような持続可能な地域を作る一つとして、横浜市港南区社会福祉協議会（以下港南区社協）「セカンドライフ大学校」の事例から、全体で考えていくことができればとご報告をいただきました。

２．樋口宗典さんからのお話

樋口さんからは、港南区社協で行ってきた「セカンドライフ大学校」の取り組みをお話いただきました。港南区社協では必要に応じて「つながり」をつくり出すことに力を入れており、この「セカンドライフ大学校」もそのうちの一つであると語ります。

地域やボランティア活動者からの声として、地域の担い手不足、ボランティア団体の高齢化による存続の危機の声や、退職した世代からは、地域のことが分からない、家に閉じこもりがちなど、様々な声が聞かれていたそうです。そこで、定年退職を迎え区内在住でこれまで地域活動を行っていない団塊世代の男性を対象に、2009 年から「セカンドライフ大学校」を開始しました。しかしながら、活動の担い手づくりが表に出たプログラムでは、「何かの役員にされてしまうのではないか」、「参加したら活

動をしなくてはならないのではないか」と敬遠されてしまいます。そこで、災害・防災講座、スポーツ、健康、多世代交流、まちの歴史、料理や家事に関することから、新たな仲間との出会い、交流や生きがいづくりまで、参加者が楽しみながら地域を知るプログラムとしたそうです。

その後「セカンドライフ大学校」を卒業した卒業生と、中間支援組織のコーディネーターが、これからどのようなことを行っていきたいのかを語り合い、時には地域のボランティア活動の紹介を行い、グループづくり（OB 会）と伴走支援を行います。そこでは、いつでも相談できる雰囲気づくり、関係づくりから、良きパートナーとして付き合っていくこと。また、卒業した OB とのつながりも大事にしており、定期的な OB 会を開催し、各 OB グループ間での情報交換や、「セカンドライフ大学校」への協力など、期を超えた OB 同士との交流にも注力されているとご報告いただきました。

最後に中間支援組織のコーディネーターは、「支援者」であり、「支縁者」であることを忘れてはならないと、中間支援組織のコーディネーターとして必要な心持ちについても語っていただきました。

３．中井政男さんからのお話

中井さんからは、ご自身が所属されている「セカンドライフ大学校（３期生）OB『輝（かがやき）』」についてお話いただきました。

中井さんは退職後、再雇用を経て６５歳からセカンドライフとして趣味の活動を楽しんでいた時にチラシを見て、「自分の考えを変えよう」という思いで「セカンドライフ大学校」に参加されたました。それまで横浜市、港南区社協や地域交流のできる施設の存在を知らなかったと語ります。

OB 会では、過去の職歴を問わない、お酒の強要もしない、現役時代の自慢をしないというルールで OB 会を運営しており、上下関係もない対等な関係で居心地が良いとお話がありました。現在では OB 会のメンバーで外出や昼食のような余暇活動を通した交流や、福祉施設等へのボランティア活動をされているとご報告をいただきました。

中井さんは、「セカンドライフ大学校」に参加したことで、多くの人と知り合い、OB 会の活動や様々な地域活動に参加でき、とても感謝しているとお話いただきました。

４．グループワーク

３つのグループに分かれ、事例を聞いての感想、中高年の参加を広げるための工夫で納得したこと、共感したところ、分科会参加者の地域では、どのようなことができるのか、事例を聞いての感想や、もっと聞いてみたいことを中心にグループワークを行いました。

分科会参加者はボランティアグループ等のメンバー、社会福祉協議会やボランティア・市民活動センターのような中間支援組織の職員など様々な方々が参加されており、活動の拡げ方、悩みや工夫など、それぞれの所属団体の立場から積極的な意見交換が行われました。

５．全体での振り返り

３つのグループからは、このセカンドライフ大学校や OB 会の活動に関する質問が多く出ました。広報活動、情報の届け方、講座の企画運営、公共施設だと実施が難しいプログラム（例えば利き酒講座）の開催の仕方や OB 会の支援方法など、もっと聞きたい！ という疑問を質疑応答から深めました。

６．分科会を開催しての成果と課題

分科会参加者が悩んでいた、あるいは関心を持つ中高年、地域や関係機関をつなぐコーディネート、中間支援組織のコーディネーターとして必要な心持ちについて、深く考えるきっかけになったと感じます。それぞれの所属団体に持ち帰り、どのようなことができるのかという点をもっと全体で深めることで、次の行動や更に活発な議論ができるのではないかと思いました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 人口減少社会の中で生涯学習が大切と考え参加しました。社協と市民の関係の中でゆるやかなプラットフォームという考えがとても参考になりました。
- セカンドライフとは言いつつ、様々な活動に活かせるお話が多かったです。全て、楽しむことにつなげていらっしゃるのが印象的でした。

企画・運営

久保　賢人（中野ボランティアセンター）【主担当・報告書】
芦澤　弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）【副担当】

No.１５　多文化共生まちあるき
～大久保に暮らす人びとと私たち～

開催目的

日本に住む外国人の人口は 340 万人を超え、そのうち都内には約 66 万人が暮らしています。様々な分野で社会を支える大切な一員となっている一方で、地域住民とのトラブルなどが声高に報道されるなど、未だに「多文化共生」が進んでいるとは言い難い側面も続いています。同じ社会、同じ地域に暮らす一員として、どのように彼らと共に暮らしていけば良いのでしょうか？

在住外国人に関する書籍を多数執筆しているジャーナリストの室橋裕和さんをゲストに迎え、日本最大級の多国籍タウンでもある新宿区・大久保地域を実際に歩きながら、参加者と共にそのヒントを探りました。

開催日時

２月９日（日）１０：００～１２：００（フィールドワーク）

参加者数

１７名（参加者１２名、出演者１名、スタッフ４名）

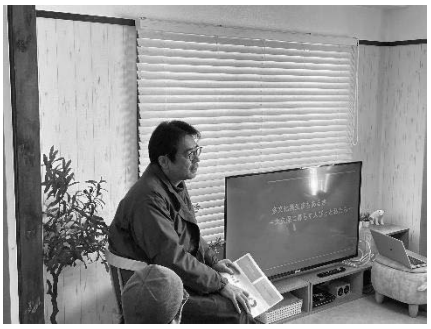
出演者

室橋　裕和さん（ジャーナリスト）

内容・成果・課題

１．内容

まずは室橋さんから大久保地域の現状についての紹介、その後はお話を聞きながら、百人町から大久保へとまちあるきを行いました。



講師の室橋裕和さん

韓国ドラマやアイドルのグッズショップ、韓国料理の飲食店など「コリアンタウン」のイメージが強い大久保地域ですが、その実態は「日本最大級の多国籍タウン」でもあります。JR 新大久保駅周辺の大久保１丁目・２丁目、百人町１丁目・２丁目では住民 19,776 人のうち 7,720 人、37.1%が外国人です。

元々は歌舞伎町周辺の飲食店で働いていた韓国人女性たちが、通勤に便利という理由でこの地域に住み始めたことがきっかけで韓国系飲食店が点在。2002 年の日韓ワールドカップを発端に注目が集まり、「韓流ブーム」の流れに乗った飲食店が急増、現在のコリアンタウンの原型が出来上がりました。しかし韓国人の在住者は実はあまり多くなく、大久保や百人町では、中国のほかベトナム、ミャンマー、ネパール、バングラデシュなど、東南アジアや南アジア出身者が多く暮らしています。

南アジア食材のお店。イートインでは日本語学校帰りの学生がチャイを飲む姿も

彼らのなかで大きな割合を占めるのが「留学生」。日本語学校や専門学校に通う学生が多く、アルバイトとして飲食店やコンビニで働く人もたくさんいるため、この地域の活気を作り出しています。他にはレストランや食材店、翻訳やウェブサービスなどの会社を営む「経営者」、こうした経営者の下で働く「会社員」など、比較的若い世代が集まっているのがこの地域の特徴です。

その一方で、元々暮らしていた日本人は多くが高齢化しており、韓国料理屋の合間をよく見ると高齢者施設が点在、朝の時間帯にはデイサービスの送迎車が行き来しています。大久保通りから一本小道に入ると、外国人が多く住むアパートが密集、高齢になった日本人が持ち家を手放してアパートに改修し、

自らは別の土地に移るケースもあります。流動性の高い外国人の若者と、高齢化した日本人、大久保地域は将来の日本の縮図と言えるのかもしれません。また、もちろん高齢化は日本人だけではありません。かつて歌舞伎町周辺の飲食店で働いていた韓国人女性も高齢となり、中には認知症に日本語を忘れ、韓国語しか話すことができなくなってしまった方もいるそうです。通常の高齢者施設ではコミュニケーションがとれず孤立してしまうことも。こうした女性たちのための福祉活動を行っている団体もあります。

生鮮食品の軒先には珍しい野菜や果物が。近所に住む日本人が買い物に来ることも少なくない。

国籍、世代が様々な人々が暮らす中で、在住者でもある室橋さんから挙げられた地域の課題は「ゴミ・騒音トラブル」「酔っ払いのケンカ」「民族間の交流」の３つ。一見すると多様な人々が同じ地域に住み、お店も軒を連ねており「民族間の交流」は進んでいるようにも見えます。しかし日本語教室やビジネスではお互いに関わることがあるものの、基本的には同じ民族のコミュニティの中で人間関係が完結してしまい、相互の交流はまだまだ進んでいないのが現状のよう。外国人は若年層が多いことから流動性も高く、この傾向に拍車をかけています。しかし共生に向けた動きも進んでおり、大久保商店街では 2017 年に「インターナショナル事業者交流会」が発足、現在は日本・韓国・ベトナム・ネパール・バングラデシュの５か国の店主が集まり、商店街の活性化や町の課題、多文化共生に関わる情報の交換を行っています。様々な人が集うお店が情報のハブになるからこそ、商店街を通じた共生の仕組みが作られています。

終了後は参加者でネパール料理のダルバートを食べました！

２．成果と課題

華やかな韓国料理やグッズの店が並ぶ大久保、アジアの若者たちの生活の場である百人町、活気溢れる通りから一本奥の通りに住む日本人、それぞれがお互いの生活を大切にしつつ、なんとか共生の道を探ってきたのがこの地域です。実際のところ「これが多文化共生の理想なのか」と問われると、安直にイエスとは言えないかもしれません。しかし様々な背景の人びとが暮らしてきた場所だからこそ、成功も失敗もノウハウが他にないほど積み重なっているとも言えます。

室橋さんからは「秩序ある町」になることが大切と話がありました。以前、大久保のゴミ捨て場で区が１カ月・24 時間ゴミ捨て場の監視を定点で行ったところ、不法投棄をしていた人の半分は日本人だったとのこと。「中にはマナーが悪い外国人もいるけれど、それは日本人も同じ。あの人がやっているならいいか、とお互いが思ってしまったら良くない。互いに協力して秩序を作っていくことが、皆が暮らしやすい町につながると思います」この報告書を読む皆さんのまわりにも外国人は暮らしているはず。大久保で起きていることはあなたの地域で起きていることの縮図でもあるのです。コンビニのレジで見かけるあの人、バス停でよく会うあの人、まずは一言声をかけるところから始めてみませんか？

参加者の声（アンケート結果などから）

・自分とは異なる文化を持つ人を尊重し、まずは仕事を通じてでも交流することで、共存できる方法が見出せるのではないかと考えました。背景がかなり違うもの同士は特に、話さなければわからないことが多いのは当然だな、と今更ながら気付かされました。
・自分の世界が広がりました。実家への行き帰りで通過するお店たち。昔はなかった食材店などに押され、元々のお店がなくなっていくなかで、ある種、異物でしたが、今回参加して、実際のお店でやり取りする中で、みんな一緒ということを感じました。講師の室橋さんがインタビューされていたように、直接お話したいと思いますが、次の機会です。お店に行ってみたいと思いました。

企画・運営

髙階　悠輔（認定 NPO 法人シャプラニール＝市民による海外協力の会）【主担当・報告書】
櫻井　佑樹（認定 NPO 法人難民を助ける会(AAR Japan)）【副担当】

No.１６　地域共生社会に向けて！大人たちに伝えたい
～【障がい者の思いと心のバリアフリー】～

開催目的

障がい当事者が地域の小･中学校に行き日々の生活や思いを子どもたちに伝える場はありますが、子どもを支える大人世代にはそのような機会が少ないです。世間では、「障がい者にやさしく思いやりを持とう！」とよく言われていますが、普段あまり障がい者と関わっていない地域の健常の人から「可哀そう、偉い」などという同情や幼い口調で声を掛けられる障がい者も少なくありません。多くの生まれつきの障がい当事者は、幼い頃に障がいを受け入れ当たり前に日々生活していますが、障がい者との関わりが普段少ない方にその様なことを理解してもらうのは難しい現状です。

そこで本分科会では、障がいを持ちながら地域で団体の代表をしているお二人から、地域の大人を対象に日々の生活や想いを語って頂き、「思いやり」や「心のバリアフリーについて」などを参加者と一緒に考え、真の共生社会実現に向け進んでいけたらと思います。

開催日時

２月9日（日）１３：３０～１５：３０

参加者数

４２名（参加者２８名、出演者２名、出演者介助者２名、スタッフ８名、ボランティア２名）

出演者

大江　崚太さん（ユニラボねりま　代表）
藤吉　さおりさん（自立ステーションつばさ　代表）

内容・成果・課題

1.　大江さんのお話

重度の脳性麻痺を抱える大江さんは、団体代表として練馬・中野区を中心に年間５校程度の小学校で福祉教育の講師をするなどして、日々活躍されています。普段の主なコミュニケーション方法は５０音順でひらがな入力できる喋るキーボードの様な「トーキングエイド」というもので、その時の気持ちややりたい事など些細な事から福祉教育の様な発表の場でも使用します。今回のスピーチも大江さんが一文字一文字入力したものをヘルパーさんが代読で発表してくださいました。

生い立ちについては、幼少時代から可能な限り地域の健常の子どもたちと一緒に過ごし、小学校では仲良くなった友達と一緒の普通クラスに通いました。入学時は障がい児専門クラスが併設されて間もない頃という事もあり、普通クラスで学ぶ事を学校側に理解してもらうまでに時間がかかったそうです。その後の学校生活は楽しく過ごし、中学も地域の区立中学の一般クラスで学びました。重度障害のある大江さんが学ぶという事を学校側になかなか理解してもらえず、家族は大変だったと仰っていました。入学してからは熱心な介助の先生もおり周囲の環境に恵まれていて、健常の子どもたちと学び一緒に遊ぶ日々はごく当たり前のことだったと仰り、また沢山の人がいる環境で過ごすことにより、ものの考えや視野、世界観を広げられたと仰っていました。その後は高校大学と進学し、「自分の生活が周りの障がい者の為になったら！」との想いで大学の卒業論文では【障がい児の教育の場の選択について】を研究されたそうです。「福祉とはみんなが幸せになる様に取り組み活動する事です」という言葉と共に大学で教わった、人には誰でも幸せになる権利があるという意味の日本国憲法第１３条〝幸福追求権〟を紹介してくださり、最後にこう述べられていました。「障がいの有無に関係なく子どもの頃から地域で一緒に過ごし学ぶ事大切です。障がいの理解を得るだけでなく、人の違いにも気づきます。その様な違いに気付く事が大切です。障がいの有無に関係なく仲良く暮らせる社会になったらと思います」

2.　藤吉さんのお話

多摩市で団体の代表をしている藤吉さんは、出産時の医療ミスにより脳性麻痺という障害を抱えています。小～高校までの 12 年間を平塚市の養護学校（特別支援学校）で過ごされました。親御さんにとって藤吉さんは初めての子どもで、障がいがあっても地域の子どもたちと一緒の小学校に通えるものだと思っていたそうです。しかし、入学前に地元の行政からは「学区内の小学校は今まで障がい児を受け入れた前例がなく、校舎も車椅子に対応できる様になってないため受け入れられません」と断られ、地元の養

護学校に通う事になりました。12 年間の学校生活は楽しかったそうですが、唯一嫌いだった授業があったそうです。それは年に一度行う特別授業『普通校との交流会』です。同じ学年の健常の子どもたちと先生が来られるという事なのですが、互いに初対面なのでなかなか話しかけられないでいると養護学校側の先生が生徒たちの中に入り障がいの特性などを伝えてしまう事もあり、結果的に子ども同士だけの交流がないまま交流会が終わってしまうので、健常の友達が出来ることは一度もなく、周りは障がい児ばかりのなかで育ったと語られていました。また、大人になってから困ったという事がたくさんあるとも述べられていました。その 1 つは同世代の健常者とどう関わればいいかわからないという事です。子どものころは親や先生など自分よりも年上の人との交流が多いのですが、年齢を重ねるに連れて同世代や年下の健常者に身の回りのサポートをしていただく事が増えていきます。今でも関わり方を試行錯誤しており、人間関係でつまずいてしまうこともあるそうです。また学校に通っていた頃は車椅子で一人で外出した事がなく、社会に出た時に知っていた方が良い事などは教わらず、交通ルールや子ども時代に学ぶべき社会の常識等を大人になってから知り苦労されたと仰っていました。最後にこう述べられました。「特別な支援とは分ける事ではありません。分けられて育った障がい者は、健常者が当たり前にやってきた、一緒に学び、遊び、時には喧嘩したという経験がありません。教育は分けるべきではないです」

3. 質疑応答

●藤吉さん

Ｑ１．どのような団体ですか？また、行政等からのサポートはどの様になっていますか？

Ａ１．１９９４年に設立して自立生活(一人暮らし)をしている障がい者と自立生活を目指す若者と介助者でつくられてます。また団体として年に何度か市役所に交渉に行き、個人の些細な事から差別の訴え等も行っています。設立直後は市も差別的表現が多かったですが、今は行政とのつながりが常にあります。

Ｑ２．障がい者と接した経験が昔からなくどう接したら良いかわかりません。アドバイスをください。

Ａ２．私の場合は、少し人見知りな部分があるので自ら声を掛けにくく、そういった障がい者も多いと思います。キョロキョロしていて何か困っていそうな障がい者がいたら、勇気を持って何か一言声を掛けてみてください。つながりを持つきっかけにもなります。「大丈夫です」と言われたら何もお手伝いしないで大丈夫ですが、有難く思い何かお手伝いを頼む方もいると思います。

●大江さん

Ｑ１．どのような目的を持つ団体ですか？

Ａ１．心のバリアフリーを目指してこだわり等があまりなく、打ち解けやすい幼児期から「障がいも健常も一緒に学び遊び仲良く一緒に過ごすことが大切」との思いで、小・中学校で障がい当事者として日々の生活や想いを伝えに行ったり、幼稚園で交流会をしている団体です。

Ｑ２．大学時代にサークル等入っていましたか？振り返って小中高大で一番楽しかった思い出は？

Ａ２．中学が一番記憶としては残っています。サークルは福祉サークルでした。

4. グループワーク

今回参加くださった皆様に向け、登壇者お二人と企画者（障がい当事者）の計 3 名が１つずつテーマを出し、各グループで討議をし、感じた事をふせんに書き込んで頂きました。テーマごとに熱い討論をしていて、ふせんに書かれた内容も長年当事者が疑問や課題として感じてきた言葉が並んでおり、その後の全体共有でも当事者の視点に立った発言が多く、白熱したグループワークとなりました。

5. 成果と課題

参加者一人ひとりが真剣に障がい当事者と向き合う時間となりました。また当事者の私もお二人のように共生社会という目的は一緒に感じられても、背景が全く違う事もあることに改めて気づかされました。今後も共生社会を目的とする障がい当事者が、地域の大人たちに語る場が増え、いつか障がい健常分け隔てなく一緒に様々な事が出来る、そんな社会なればと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

・障がい者とそうでない人を分けずにいる社会を実現できたらなと思いました。
・初っぱなから固定観念に提言がなされ、衝撃を受けた。

企画・運営

細江　奈音（荒川ボランティアセンター登録ボランティア）【主担当・報告書】
冨沢　陽翔（順天堂大学）【副担当】

No.１７　子どもの社会参画と育ちを考える
～映画「こどもかいぎ」をもとに～

開催目的

日本の若者は、外国に比べ「自分の行動で国や社会を変えられる」と思う割合が低いという調査結果があります。これは、子どもの頃に自己肯定感や自己効力感が育まれること、そして他世代の人々や社会と関わる機会や経験が少ないからではないでしょうか。これからの社会を担うのは子どもたちです。

映画「こどもかいぎ」関連動画を鑑賞し、子どもたちがどう考えているのか、大人が子どもの育ちのためにできることは何かを一緒に考えました。

開催日時

２月９日（日）１３：３０～１５：３０

参加者数

３９名（参加者３２名：うち会場１８名　オンライン１４名、出演者１名、スタッフ６名）

出演者

中山　利彦さん（社会福祉法人省我会 新宿せいがこども園　副園長）

内容・成果・課題

１．「こどもかいぎ」を知る

（１）動画視聴

「こどもかいぎ」とは何かを知るために、「映画『こどもかいぎ』ダイジェスト映像」「コロナ禍の子どもたちにホンネを聞いてみた」の２本の動画を視聴し、グループで感想を話し合いました。

（２）中山さんのお話

「こどもかいぎ」はフランスの「こども哲学」の取り組みがきっかけ。子どもはその発達過程の中で、言葉やジェスチャーなどで相手に自分の意志を伝えることを学んでいきます。子ども同士が自然と関わることを保障し、大人も含め子どもの発言に対して応える「受容と応答」が重要です。小さい頃からこの「受容と応答」が身についていると、小学生になっても対話をすることに躊躇がなくなります。これが「こどもかいぎ」につながるのです。

２．「こどもかいぎ」を実施するには

（１）動画視聴

次に、実際に「こどもかいぎ」をみなさんの現場で実施するヒントを得るため、「『こどもかいぎ』をしたら大混乱になった」「いじめのリアルと子どもたちのホンネ」の２本の動画を視聴し、中山さんにお話を伺いました。

（２）中山さんのお話

小学生たちだけで集まっても「こどもかいぎ」は成立しません。進行役は大人の役割ですが、最も大切なことは子どもの権利についてその大人が共通理解として持っておくこと。そこから意見表明につながる。会議という場だけでなく、日頃からの対話が大切と言います。

子どもの権利条約は１９８９年に国連で採択され、日本は１９９４年に批准しています。条約の４つの柱は、生きる権利・育つ権利・守る権利・参加する権利。重要なのは、第３条にある児童の最善の利益と、第１２条の意見を表す権利、第１３条の表現の自由です。最善の利益については、英語では利益

はインタレストですが、興味関心と訳した方がよく、子どもに最もよいことは何かを考える責務が私たちにはあります。意見を表す権利については、意見はオピニオンではなくビュー。つまり言葉を発せない小さな子どもたちが示す感情も意見（ビュー）なのです。この意見表明を、子どもの発達に応じて十分考慮することが私たち大人の役割と言えます。表現の自由については、自由な方法で考えを伝える権利ですが、一方で子どもは知る権利も持っています。子どもの知的欲求を満たす環境を用意しておくこと、大人も知っていることを伝えることが重要です。

「こどもかいぎ」の実施にあたっては、こういった普段からのしかけが背景に存在していることを理解しておく必要があります。最初に視聴したような喧々諤々の子どもたちの議論の前提には、こういったことがあるのです。「こどもかいぎ」が成立するには、子どもの選択を保障する、子どもの意見を私たちが受け入れるという環境が大切なのです。

３．質疑応答

中山さんのお話の後、グループで感想を話し合い、質疑応答を行いました。

問．自分の意見を否定されてしまう環境にいる子どもたちへはどんなアプローチが可能でしょうか。

答．子どもが意見表明できる場所を、多様な場所で設けることが重要です。話せる場所が必ずどこかにあるという思いを持てることで、別の場所でも自ら意見表明できるようになります。

問．「こどもかいぎ」で進行役の価値観が入りそうですが。

答．それぞれの価値観で進行して問題ありません。この先生の時はこうだけど、別の先生はこうだと子どもたちはわかります。むしろ一人の先生に任せず、複数の先生が関わることが大切です。

問．園で育った子どもたちはその後どうなったでしょうか。

答．選択は自己決定であることを小さい頃から積み重ねていったら、自分の進路や友だちも自分で決めるようになりました。大人が口を挟む余裕はありませんでした。

問．園で育った子どもたちはいわゆる不登校や発達障害になったりするでしょうか。

答．不登校になった子どももいますが、家では普通に暮らしており、友だちも従来の関係のまま、また学校に復帰したそうです。また、発達障害についても、気にしているのは大人だけ。多様な子どもがいることを子どもたち自身が、生活を通して自分で知っていきます。

４．成果と課題

・「こどもかいぎ」というスタイルに限らず、話し合う、選ぶ、表現する、行動を促すなど、子どもの主体性を引き出すしかけが普段から必要であることを学びました。
・このような「見守る保育」が他の保育園や幼稚園にも広がっていくとよいと思いますが（実際に広がりつつあるという話）、何より、多くの時間を過ごす家庭や学校でも、このような取り組みを普段から取り入れていくことが一番大切ではないかと感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・子どもの選択をいかに大切にするか。大人が勝手に決めないことが大事だと思いました。
・対話の目的の先に、違う者同士がどうやって社会で共生していくか、があると思った。大人でも対話が難しい人がいるなかで、このように対話までに至る道のりを大切にしたいと思った。

企画・運営

市川　徹（㈱世田谷社/一般財団法人世田谷コミュニティ財団）【主担当・報告書】
岡田　まどか（光明第二保育園）【副担当】

No.１８　能登のいま

開催目的

令和６年１月１日に起きた能登半島地震。あれから１年が過ぎました。我が国では、阪神淡路大震災から３０年、東日本大震災から１３年がたちます。能登半島地震で被災しながらも、支援活動を行った人の話を聞きながら、能登半島地震の被災地支援で私たちが何ができるかを考えます。

開催日時

２月9日（日）１３：３０～１５：３０

参加者数

３９名（参加者２８名：うち会場２５名　オンライン３名、出演者４名、スタッフ６名、ボランティア１名）

出演者

司　会：加納　佑一（東京都ボランティア・市民活動センター）
登壇者：池端　隼也さん（輪島市在住　シェフ）
　　佐藤　純さん（特定非営利活動法人 Hand Over Japan(HOJ)）
　　関谷　麻美さん（被災者支援ボランティア・プログラム参加者）

内容・成果・課題

１．池端隼也さんから輪島市で実施した炊き出しについて

（１）地震当日から炊き出しを実施するまでの経緯

地震当日は、穴水町から輪島市への帰路でした。穴水町の消防署で備蓄用カップ麺を自分の車でお湯を沸かしてカップ麺を提供しました。輪島市に着いて、経営する飲食店のスタッフと他の飲食店の人の３名で飲食店の食材を活用して炊き出しを開始しました。

（２）炊き出しを実施した経緯

地震後自分の足で調査し、1,500 人程度の人が食べられていないことがわかりました。海外の支援団体とは SNS を通じて連絡が来て、2,000 人分の食事が作れる体制を整えました。調理している所を見た避難している年配の方が感涙した様子に、炊き出しを続ける意志が固まりました。

（３）避難所で食事を作るときの注意点と気づき

同級生の医者から、食中毒に気を付けること、高齢者が多いので野菜たっぷり、塩分控えめで作るようアドバイスをもらいました。野菜をたくさん出すということを意識して、避難所が減ってきた６月頃まで１日も休むことなく 10 万食以上を提供しました。NGO から人件費の支援を受けました。気づきは、炊き出しに関わった人はすべて地域の人で被災者だったけれども、炊き出しに加わったことで、元気になる人も出てきました。ボランティアは自分を元気にするものであるということがわかりました。

２．佐藤純さんから能登半島地震からの教訓と日ごろの備えについて

（１） 能登地震被災者支援に関わった経緯

災害派遣看護師として１月 30 日から派遣され、1.5 次避難所で活動をしました。その後内閣府の事業で、七尾市や輪島市の NGO の活動に参加しながら、能登で活動をしました。また、福祉避難所でも運営支援をしました。自団体では、葛飾区で子ども食堂を運営していたので、子ども食堂を七尾で実施しました。水害が起きたときの被災者支援では、七尾市や輪島市で排水溝の掃除や家屋清掃をしました。

（２） 令和６年能登半島地震からの教訓

1.5 次避難所は設備も整えられて、能登から高齢者の方が多く避難されていました。指定避難所は、時期によって様々ですが、避難所内の設備は日が経つに連れて改善されました。仮設住宅は、狭く、

また隣にどんな人が住んでいるのかわからないため、被災者の方々は不安な気持ちで過ごされていました。道路は、隆起や陥没、家屋倒壊により移動しにくい状態でした。家屋被害は、特に水害の時には埃が多く健康被害が心配されました。過去の災害では避難所での洗濯物を干す場所が課題でしたが能登半島地震から乾燥機が設置されました。

（3） 災害関連死を防ぐ

トイレ、食事、寝床を整備することが一番大切です。その他、生活不活発病予防、レクレーション・リハビリテーション・人との交流で、なるべく早く日常を取り戻すことが大切です。

（4） 日ごろの備え

自宅がある地域では、多世代の居場所作りを活動として行っていますが、平時から地域とつながることが過去の災害時の支援活動をとおして一番大切だと感じました。そのため、こうした地域住民同士が地域とつながれるような活動をしていきたいと考えています。

3．関谷麻美さんから個人での災害ボランティアへの参加について

（1） これまで参加したボランティアについて

東日本大震災で東京都が用意したボランティアバスで、陸前高田市や気仙沼市でがれき撤去や避難所での物資仕分けをしてきました。ボランティアに行く前には心構えを教わりました。これ以降、広島の土砂災害、常総の水害、西日本豪雨等でもボランティアに参加しました。その後これまでに活動してきた地域とのご縁でそれらの地域の魅力ある商品の販売会等のイベントに参加しました。

（2） 能登で参加したボランティア活動について

まずは世田谷区の募金活動に 3 回協力しました。3 月に世田谷ボランティア協会の人が能登に視察に入るということで同行しました。その中で家財道具の搬出やがれきの撤去と、津波の被害があったところでは泥だしをしました。この時点で人手が必要ということが分かったので 4 月からグループでボランティアに参加し穴水町で活動しました。穴水町社協からボランティアセンターにコーディネーターを派遣してほしいという依頼があり派遣されました。穴水町ではボランティアをマッチングする班に配属されました。4 月から始まった東京都の被災者支援プログラムでは地域での居場所作りとしてのサロン活動に参加しました。住民の声として最初は安否確認だったが生活再建の話に変わってきました。

（3） これからやっていきたいこと

分かること、知ること、思うこと、考えることを大切にしていきたいです。能登で出会った人たちがしたいこと、望むことを一緒に考えていきたいと思います。最後に能登にたくさんあるスギナを販売していきたいと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 期待以上の内容でした。色々な方の色々な立場の視点で、知らなかったこと、気がつかなかったことをたくさん教えてもらいました。
- このような、現状を知る機会があれば積極的に参加していきたいと思いましたし、やはり平時から自分の地域コミュニティについても大事に関わっていきたいと思いました。
- ボランティアとして支援に入ったわけではなく炊き出しをはじめた池端さんの、支援団体とつながったのは SNS だという話は、SNS の重要性を感じました。

企画・運営

櫻井　佑樹（認定 NPO 法人難民を助ける会(AAR Japan)）【主担当・報告書】
佐藤　純（NPO 法人 Hand Over Japan(HOJ)）【副担当】

No.１９　クロージング「Vamos！ 市民社会のミライ ～そのときわたしたちは何をしているだろうか？～」

開催目的

今回のフォーラムでボランティアや市民活動に関心を持ってもらうため、このクロージングでは、参加者が今感じているこの気持ちを一歩進めて、さらに考え、新たな行動につなげていただくことを期待して実施しました。参加者の気持ちをさらに盛り上げ、そして一緒に行動している仲間を実感できる、そんなクロージングのひとときを演出したいと考えました。

開催日時

２月9日（日）１６：００～17：３０

参加者数

７２名（参加者５９名：うち会場４７名　オンライン１２名、出演者４名、スタッフ６名）

出演者

コーディネーター 神元　幸津江さん（認定 NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク）
パネリスト 枝見　太朗さん（社会福祉法人東京都共同募金会）
パネリスト 高階　悠輔さん（認定 NPO 法人シャプラニール＝市民による海外協力の会）
パネリスト 佐藤　加奈さん（明治大学 国際日本学部４年）

内容・成果・課題

1．内容

「市民社会の未来」をテーマに、世代や背景の異なる３名の登壇者が自身の経験と未来観を共有しました。その後、参加者はフォーラムを通じて学んだことや感じたことを共有し、未来に向けての取り組みをグループワークで話し合い、全体共有を行いました。

（１）パネリストの考える未来とは

東京都共同募金会の枝見太郎さんは５年後を未来と捉え、シャプラニールの高階悠輔さんは 10 年後の 40 代を未来とし生活や市民活動の変化を考えて、大学生の佐藤加奈さんは若者のボランティア参加のあり様の変化について述べました。

（２）ボランティアと寄付文化の育成の必要性

枝見さんは、1983 年のマザー・テレサとの出会いから始まる自身のボランティア活動の経験を共有し、日本における市民活動の発展について話しました。また高階さんからは、日本の寄付文化が下火であることが指摘され、市民活動の活性化のためにはお金を通じた支援も重要だとの指摘がありました。佐藤さんからは、若い世代のボランティアに対する認識や他領域の問題への取り組み、今後ニーズが高

まる多文化共生活動への参加について語りました。社会問題への関心が個人的な経験から生まれ、それを実際の活動につなげていく過程が重要ではないかとの意見も出ました。

2. 未来の社会のためのワーク

参加者は、未来についての個人の思いを記入するワークを行い、テーブルごとに、自分にとっての未来（何年後か）を考え、その社会の実現に向けて何ができるかについて意見交換を行いました。会場参加者とオンライン参加者は、その後グループでの共有を行いました。

最後に、パネリストの未来に向けた思いを発表し、枝見さんは５年後の 10 月１日に東京駅周辺で共同募金のオープニングイベントを企画・実施すること、高階さんからは日本の寄付文化を変えるための取り組みを推進すること、佐藤さんからは人間らしく生きられる社会の実現に向けて活動を続けたいという話がありました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 「ボランティア」という言葉をめぐる時代的な変遷が感じられて勉強になりました。
- ３つの世代の未来の話が聞けて想像が膨らみました。
- 自分の未来、市民社会のミライ、思っているよりも考え深く、でも自分のこれからの活動の道しるべになるような気がしました。
- バックグラウンドが違う方々とお話でき、色んな考え、視点をとりいれることができ、とても充実した時間になりました。

企画・運営

秋田 正人（社会福祉法人賛育会）
枝見 太朗（社会福祉法人東京都共同募金会）
神元 幸津江（NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)）
髙階 悠輔（認定 NPO 法人シャプラニール=市民による海外協力の会）
高橋 義博（府中市市民活動センター プラッツ/Tripod）
新居 みどり（NPO 法人国際活動市民中心(CINGA)）【報告書】
西島 雅行（江東区ボランティア・地域貢献活動センター）

特別企画　ふれあい満点見本市「展示・販売ブース」
～NPO・NGO の作品展示販売～

開催目的

例年区境ホールで開催していた「ふれあい満点市場」が今年からリニューアル！　ふれあい満点見本市「展示・販売ブース」と名前を変え、会場もエレベーター前のエントランスホールで行いました。ボランティアグループや福祉作業所の方の手作りの作品には、作り手の想いがこめられています。お買い物をしながら、作品ができるまでのことや、作品を作っている方のことをぜひ聞いてほしい、そして出展団体同士も交流できる場となることを期待し、企画しました。

開催日時

2月8日（土）１１：００～１６：００
2月9日（日）１１：００～１６：００

出展団体

２日間のべ 19 団体
オレンジライン／かたくり／ケアマフを編む会／支えあう 21 世紀の会／CS-Tokyo／ジャカルタ・ジャパン・ネットワーク／第二ワーク・イン・あすか／地球の友と歩む会(LIFE)／つばさ工房／東京カリタスの家／東京都青年団体連合／難民自立支援ネットワーク(REN)

内容・成果・課題

昨年より広い会場で実施した今年は、８日（土）は９団体、９日（日）は 10 団体に出展いただき、573 人の方にブースに立ち寄っていただきました。冷たい風が吹き込み厳しい寒さの中での開催でしたが、出展団体のみなさんはにぎやかな雰囲気を出してくださり、通りがかりの方に明るく話しかけておられる姿が印象的でした。

出展団体のみなさんからは、「明るくて、広くて、人の出入りも多くて、たくさんの方に見てお買上げいただけました」「他の出展者さんとも交流することができた」との感想をいただいた一方で、「以前より風が強く、空調がきかず寒かった」「（風対策のため）ブースの位置について、検討が必要かと思いました」とのご意見もいただきました。今年初めて使用した会場のため環境面での改善点が多く見受けられましたが、出展団体のみなさんの思いがこもった作品の数々をひとりでも多くの方の目に留めていただけるよう、次回も工夫をして開催したいです。

当日の様子

つばさ工房のみなさん

オレンジラインさん

企画・運営

東京ボランティア・市民活動センター　ボランタリーフォーラム担当【主担当・報告書】
東京ボランティア・市民活動センター　満点担当

特別企画　ふれあい満点見本市「体験ブース」
～NPO・NGO の活動体験～

開催目的

ふれあい満点見本市では、今年から新たにボランティアグループや NPO、NGO の活動を一緒に体験する「体験ブース」を開催しました。「展示・販売ブース」と合わせ、市民の方にとってボランティア・市民活動への参加のすそ野が広がるきっかけとなることを目的としています。体験を通して楽しみながら団体の活動を知っていただくこと、また出展団体のみなさんから団体の成り立ちや活動目的も一緒にお伝えしていただき、団体をより身近に感じられる機会となることを意識して企画しました。

開催日時

２月８日（土）１１：００～１３：００／１４：３０～１６：３０
２月９日（日）１１：００～１３：００／１４：００～１６：００

出展団体

２日間のべ４団体（各時間帯１団体の出展）
GONA／ジャカルタ・ジャパン・ネットワーク／ケアマフを編む会／地球の友と歩む会(LIFE)

内容・成果・課題

「体験ブース」は初の試みであったため、実行委員の所属団体や長くふれあい満点市場にご出展いただいている団体、東京ボランティア・市民活動センターの会議室を何度もご利用いただいている団体に個別にお声がけをし、出展いただきました。両日とも２団体ずつ、のべ４団体に出展いただき、53 人の方が活動を体験。通りがかりの親子もブースに立ち寄ってくださり、ここでしかできない貴重な体験に満足してくださいました。

「体験ブース」はメイン会場から少し離れた区境ホールでの開催であったため、エントランスホールでの「展示・販売ブース」との一体感が出にくかったことが課題となりました。「展示・販売ブース」で買い物をしてくださった方に「体験ブース」にも来ていただけるような呼びかけが行えると、より一体感が生まれ多くの方に参加いただけるのではないかと思いました。

各時間帯で
１団体ずつ、
区境ホール全体を
使って出展

親子で切手貼り体験→

企画・運営

東京ボランティア・市民活動センター　ボランタリーフォーラム担当【主担当・報告書】

特別企画　ボランティア・市民活動情報誌『ネットワーク』展

開催目的

ボランタリーフォーラムとのコラボ企画として、今回も当センター発行の市民活動情報誌『ネットワーク』表紙原画展を行いました。原画を描いているのは、フローラル信子さん。イラストには、「つながり」や「コミュニティ」、「ともに生きる」「よりそう」「未来につなげる」などのフローラル信子さんの想いが込められていると思いますが、ともかくも、観ていただいて温かい気持ちになったり、癒されたりしていただけたら…と、毎年、多くの人の目に触れるフォーラムに合わせて開催しています。

開催日時

２月７日（金）～２月２８日（金）

内容・成果・課題

昨年の「展示数が少ない。もっと観たい」という声に応え、点数を増やし、画風の異なる数年前のイラストも展示しました。また、昨年までは保護のため原画にビニールをかけていたのですが、光って見えづらいため、原画そのものを展示したり、イラストがより映えるよう白いパネルを使用するなど、例年よりも少し工夫をしました。そのため、原画を観る方の滞在時間が長くなったように感じます。

今回は、原画を目的に来所したという方もいて、ネットワーク担当一同、喜ばしいかぎりです！

いつも原画に添えてくださる、
フローラル信子さんの絵手紙
も展示に添えました！
右上画像はネットワーク誌。
タイトルや文字が載ると
このような感じになります。

企画・運営

秋池　智子（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告者】
朝比奈　ゆり（東京ボランティア・市民活動センター）

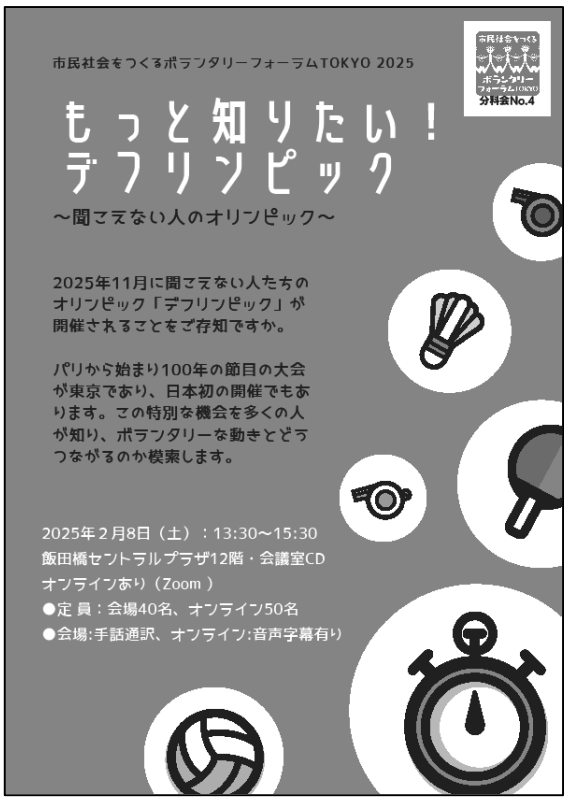
★チラシから見る各プログラムの紹介

No1
ボランティアが社会を変える
～区市町村から始める身近な仕組みづくりへのアプローチ～

No2
暮らしとつながる世界の森を考えよう
～パーム油を知っていますか？～

No3
そのトピックは事実？ フェイクを見抜いて社会をよくする

No4
もっと知りたい！デフリンピック
～聞こえない人のオリンピック～



No5
「予期しない妊娠」は私のせい？ PART1
～女性を取り巻く出産の現場から～

No6
「無機質な住民」から「彩りある市民」へ
～まちあるきから考える！まちの風景、今未来(いまみらい)～

No7
学生サミット ～団体運営に革新を～

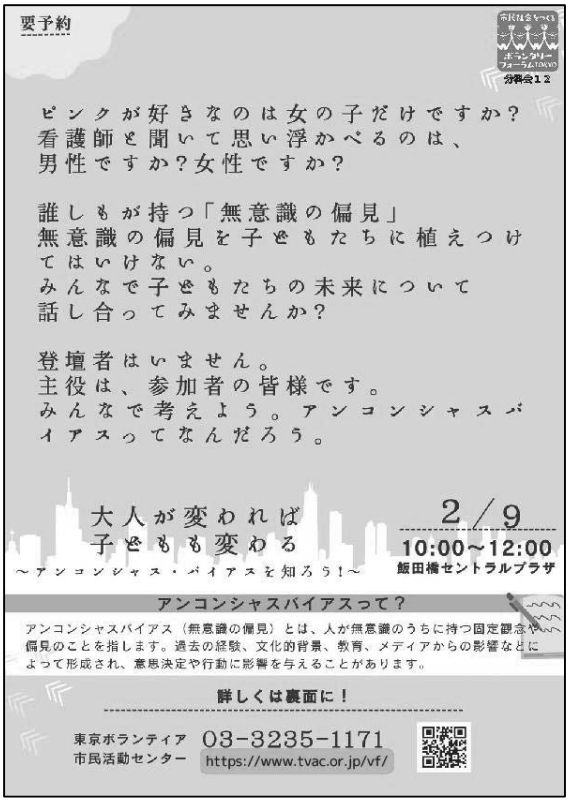
No8
場づくりのいろは ～居場所づくりで大切な事とは～

No9
「予期しない妊娠」は私のせい？ PART2
～女性を取り巻く出産の現場から～

No10
交流会 カフェ＆バル🍸VAMOS

No11
「親なきあと」を考える
～老障介護の現実と課題について～

No12
大人が変われば子どもも変わる
～アンコンシャス・バイアスを知ろう！～

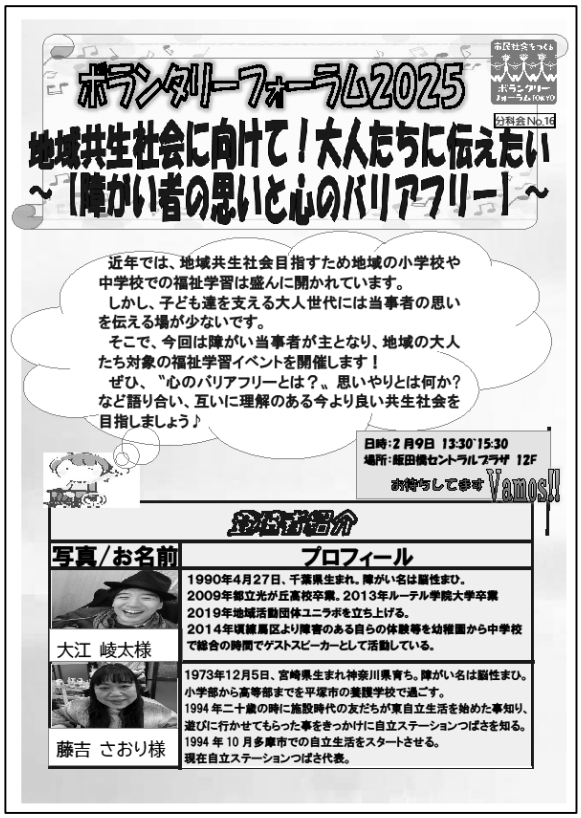


No13
多文化共生x街角 - コインランドリー・量り売り・カフェ
生活の場から出会いを考える

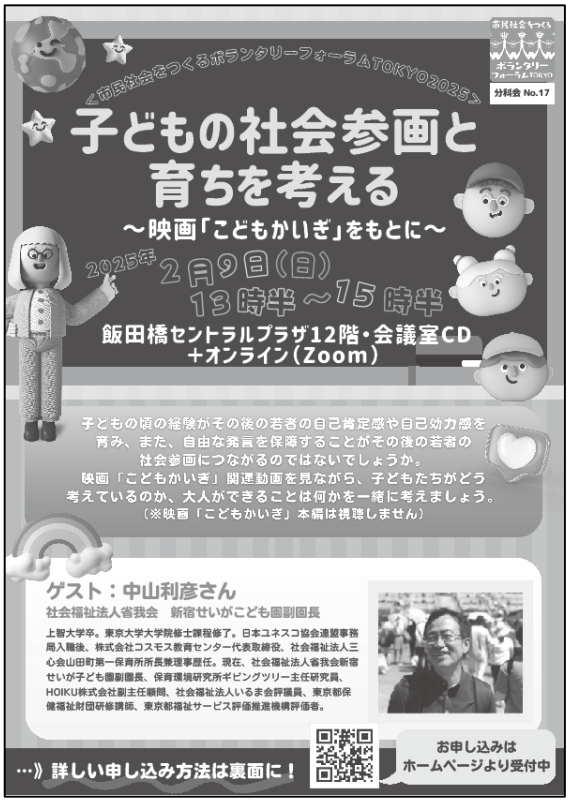
No14
セカンドライフを充実させるボランティア・地域活動のコツって
何だろう？

No15
多文化共生まちあるき
－大久保に暮らす人びとと私たち－

No16
地域共生社会に向けて！大人たちに伝えたい
～【障がい者の思いと心のバリアフリー】～

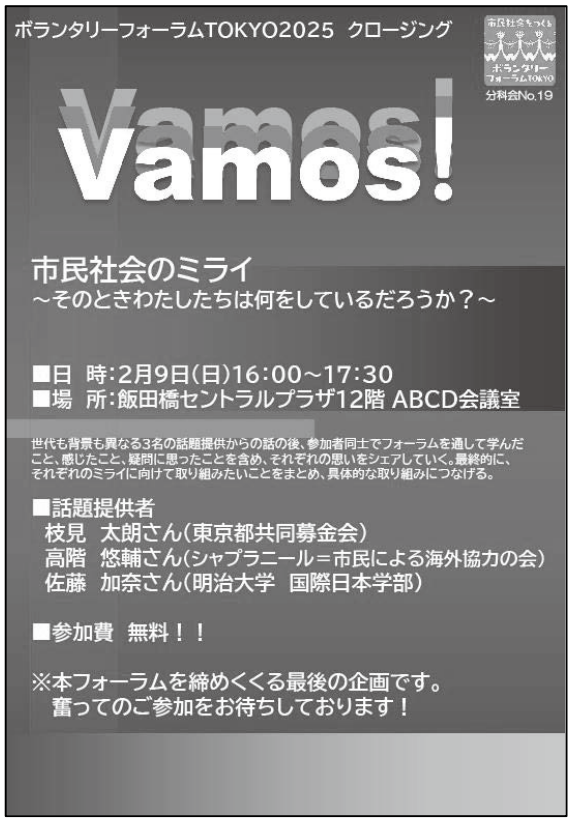


No17
子どもの社会参画と育ちを考える
～映画「こどもかいぎ」をもとに～



No18
能登のいま

No19
クロージング「Vamos！市民社会のミライ～そのときわたしたちは何をしているだろうか？～」



市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO
開催状況

回	開催年	全体テーマ	カテゴリー
1	2004	「つなぐ つながる つなぎあう」	なし
2	2005	「つなぐ。つながる。つなぎあう。」	一日コミュニティスクール、災害から生をみつめる、IT がつなぐ、街を発見する足たち、アートがまちに作用する、ホームレス問題と私たちの暮らしを考える、私にとってのボランティア、介護をかんがえる、社会の仕組みを考える、虐待を防ぐ
3	2006	「つなぐ、つながる、つなぎあう。」	体験ボランティア入門編、ブラッシュアップ NPO/NGO、社会の課題最前線！、アート、社会のしくみ
4	2007	「気づく、動く、変える、市民の力。」	格差社会、制度・仕組みの欠陥・ひずみ、社会の課題最前線、ボランタリズム
5	2008	「危機（クライシス）に立ち向かう市民活動」	福祉制度の崩壊から創造へ、環境破壊と創造、ボランタリズム復活への道、暮らしをみつめて
6	2009	「今、市民として“生きる価値”を問う」	社会の仕組みと制度、安心して暮らせる地域社会づくり、「市民社会」の担い手づくり、お金で買えない価値
7	2010	「希望は市民（わたしたち）が創る」	つながる、発信する、考える、育てる
8	2011	「市民（わたしたち）が創る公共～紡ぎあう地域の絆～」	社会に必要な仕組み、地域とのつながり、育ちあう市民、ボランタリズム
9	2013	「試される市民力（わたしたちのちから）」	つながり、生活・くらし、若者の市民力、ボランタリズム
10	2014	「気づく・築く　市民力（わたしたちのちから）」	生活・くらし、地域・居場所、若者の市民力、ボランタリズム
11	2015	「今を想い、未来をつくる」	グローバルとローカル、暮らしと居場所、ボランタリズムと組織運営、いまと未来
12	2016	「私たちがつくる あしたのピース」	なし
13	2017	「暮らしの中から動きだす、創りだす。」	地域、居場所、子ども・若者、市民活動・NPO、ボランティア、社会・制度、当事者・多様性、フィールドワーク
14	2018	「つながりをずっと出会いをもっと」	社会・しくみ、ｺﾐｭﾆﾃｨ、参加のかたち、生き方・はたらき方
15	2019	「イロドリある未来へ～わたしから踏みだす一歩～」	参加・人の力、ダイバーシティ、カタチ、時代・未来
16	2020	「今こそ動こう！イロドリある未来へ～」	今見えていること（社会課題）、未来の課題・未来に向けて今すべきこと、ボランタリーな動き
17	2021	「つながるチカラ　新しいカタチ」	地域・居場所など、障害理解・当事者など、ボランティア、新しい取り組みなど
18	2022	「みんなで考える。だから、オモシロイ。」	アフターコロナ・サスティナブル、凸凹ライフステージ、居場所、サスティナブルボランタリズム
19	2023	「Think Act Smile☺」	孤立・孤独、地域、多文化、平和・人権
20	2024	「希望ある未来をつくる」	なし
21	2025	「Vamos！ 市民社会のミライ ～そのときわたしたちは何をしているだろうか？～」	なし

＊2012 年は「第 20 回全国ボランティアフェスティバル TOKYO」開催のため未実施

市民社会をつくるボランタリーフォーラムＴＯＫＹＯ2025　実行委員名簿

（敬称略 五十音順）

	氏 名	所 属 団 体	実行委員経験回数
1	秋田　正人	社会福祉法人賛育会	初めて
2	秋本　美帆	中央大学文学部	2
3	芦澤　弘子	聖学院大学ボランティア活動支援センター	8
4	市川　徹	㈱世田谷社／一般財団法人世田谷コミュニティ財団	9
5	犬塚　尚樹	NPO法人ふれあいの家　おばちゃんち	5
6	枝見　太朗	社会福祉法人東京都共同募金会	20
7	岡田　まどか	光明第二保育園	初めて
8	神元　幸津江	NPO法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD）	11
9	鹿住　貴之	認定NPO法人JUON（樹恩） NETWORK	20
10	久保　賢人	中野ボランティアセンター	2
11	櫻井　佑樹	認定NPO法人 難民を助ける会 （AAR Japan）	初めて
12	佐藤　純	NPO法人 Hand Over Japan（HOJ）	2
13	髙階　悠輔	認定NPO法人シャプラニール＝市民による海外協力の会	初めて
14	高橋　義博	府中市市民活動センター　プラッツ/Tripod	10
15	竹島　孝俊	GONA	初めて
16	田中　祥子	デロイト トーマツ グループ合同会社	2
17	冨沢　陽翔	順天堂大学	初めて
18	中村　達也	なぎさ和楽苑	初めて
19	新居　みどり	NPO法人国際活動市民中心（CINGA）	2
20	西島　雅行	江東区ボランティア・地域貢献活動センター	初めて
21	橋本　碧	練馬ボランティア・地域福祉推進センター	初めて
22	橋谷　優希	日野市ボランティアセンター	初めて
23	細江　奈音	荒川ボランティアセンター登録ボランティア	初めて

●事務局

高山　和久	東京ボランティア・市民活動センター
吉田　真也	東京ボランティア・市民活動センター
山添　瞳	東京ボランティア・市民活動センター
後藤　匠	東京ボランティア・市民活動センター
太田　学	東京ボランティア・市民活動センター

■協賛・協力

＜　特　別　協　賛　＞

西武信用金庫
デロイト トーマツ グループ
株式会社三菱 UFJ 銀行

＜　協　賛　＞

NEC ネッツエスアイ株式会社
社会福祉法人清水基金
公益財団法人 SOMPO 福祉財団
社会福祉法人テレビ朝日福祉文化事業団
東京都生活協同組合連合会
公益財団法人日本社会福祉弘済会
公益財団法人日本テレビ小鳩文化事業団
株式会社熊谷組
特定非営利活動法人モバイル・コミュニケーション・ファンド

＜　協　力　＞

生活協同組合パルシステム東京
公益財団法人 SOMPO 環境財団
中央労働金庫
モンデリーズ・ジャパン株式会社

（敬称略）

✿ボランティアでご協力いただいたみなさま✿

ボランティアのみなさま

ボランティアのみなさまと、山崎美貴子所長

ボランタリーフォーラム実施にあたっては、
５名のボランティアの方にご協力いただきました。
心から感謝申し上げます。誠にありがとうございました。
また次回、ボランタリーフォーラムでお待ちしております。

●令和６年能登半島地震及び奥能登豪雨の被災者支援を目的として、
ボランタリーフォーラム開催中（２月８日・９日）に募金活動を行いました。
２日間で 31,500 円が集まりました。
募金は全額、中央共同募金会の「ボラサポ」に送金します。
ご協力ありがとうございました。

ボランタリーフォーラムにご協力いただいたみなさま

フォーラムを開催するにあたり、多くの方にご協力いただきました。
寄付や物品提供等、ご協力をいただいた企業・団体のみなさま、
当日の運営にご協力いただいたボランティアのみなさま、
企画・運営に携わった実行委員のみなさま、
多くの方に支えられ、無事開催することができました。
多大なるご支援・ご協力をいただきましたこと、
心より御礼申し上げます。
誰もが参加できる市民社会を目指し、
活動を続けていきたいと思います。
引き続き、ご支援、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2025
報　告　書

〈発　行〉　市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO 2025 実行委員会
事務局　東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823　東京都新宿区神楽河岸 1-1
TEL 03-3235-1171　/　FAX 03-3235-0050
https://www.tvac.or.jp

〈発行年月〉　2025 年 3 月

〈定　価〉　1,100 円（1,000 円＋税 10%）

無断で複製・転載することを禁じます

市民社会をつくる
ボランタリー
フォーラムTOKYO